

スロヴァキアの「首都」をめぐる戦間期の議論

—— フェドル・ルッペルトの中心都市論を手掛かりに ——⁽¹⁾

香 坂 直 樹

はじめに

本稿は戦間期のチェコスロヴァキア共和国においてルター派の宗教者かつ文化人として活動したフェドル・ルッペルトが主に 1920 年代に執筆し公表したスロヴァキアの「中心都市」⁽²⁾に関する諸論考を用いつつ、スロヴァキアの中心地に関する認識を考察する。

まず本稿の問題関心を整理したい。筆者はこれまで戦間期のチェコスロヴァキア共和国内のスロヴァキアの地位とその変遷に関心を抱き、研究を行ってきた⁽³⁾。議論の前提としてスロヴァキアの地位の変遷を簡潔に確認したい。現在のスロヴァキア共和国に相応する地域は、1918 年以前のハンガリー王国内では単一の行政単位ではなかった。この「スロヴァキア」という領域は、1918 年 10 月末のチェコスロヴァキア建国後、1919 年前半のチェコスロヴァキア政府による実効支配の確立、パリ講和会議とサン・ジェルマン条約及びトリアノン条約による国境線画定と数度の地方行政制度改革を経て、1928 年 7 月の州制度施行とスロヴァキア州の成立によって初めて公式の行政単位として登場した。ここに成立したスロヴァキアの境界は、この後 1938 年 11 月初めのウィーン裁定に基づく南部スロヴァキアのハンガリーへの割譲により一時的に崩れるが、基本的には第二次世界大戦後に回復され⁽⁴⁾、1993 年 1

- 1 本稿は松下国際財団の 2008 年度研究助成に基づく研究成果の一部である（研究題目『『スロヴァキア』の地位に関する 1930 年代の諸構想：『国民の領域』の具体化過程』、助成番号：08 - 090）。この場を借りて松下国際財団への謝意を示したい。
- 2 ここで「中心都市」と訳した単語のスロヴァキア語による原語は“hlavné mesto”である。この単語は英語の“capital city”に相当する単語であり、通例は国家の「首都」を示す場合に用いられるが、州都や県都などある地域の中心的な都市を指す場合にも使用される。本稿では、ブラチスラヴァやルッペルトの議論に関する場合は「中心都市」と訳し、他国の事例や一般論の場合は「首都」と表記する。
- 3 拙稿「1927 年の州制度導入に関するスロヴァキア人政治家間の論議」『年報 地域文化研究』（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻）第 7 号、2004 年、195-216 頁；拙稿「1920 年代初めのスロヴァキアの地位に関する諸構想：自治論と県制度擁護論に見るスロヴァキアの定義」『東欧史研究』（東欧史研究会）第 28 号、2006 年、1-22 頁。
- 4 1947 年締結のパリ講和条約に基づくブラチスラヴァ近郊のドナウ川右岸地区のハンガリーからの獲得、及び 1945 年に実施されたポトカルパツカー・ルスのソ連への割譲に伴う国境変更があるため、厳密に述べるならば、第二次世界大戦後のスロヴァキアの境界線は 1938 年 11 月以前と同一ではない。Ignác Romsics, *Parížska mierová zmluva z roku 1947* (Bratislava: Kalligram, 2008), pp. 280-282, 305; Peter Švorc, *Krajinská hranica medzi Slovenskom a Podkarpatskou Rusou (1919-1939)* (Prešov: Universum, 2003), pp. 385-388.

月に成立したスロヴァキア共和国へと継承される。以上の経過を踏まえるならば、戦間期のスロヴァキアの急速な地位向上は、19世紀以降のスロヴァキア民族運動に関与した知識人の中で漠然と想定されていた「スロヴァキア」が具体化され、行政単位として可視化される過程だったと解釈できる。

この過程においては、チェコスロヴァキア共和国内でのスロヴァキアの地位、ないしは「スロヴァキア」という領域に付与される意味が問題となった。ここでは戦間期の共和国が「チェコスロヴァキア主義」理念に基づき、一つのチェコスロヴァキア・ネイションの国民国家として解釈されたことが重要である。第一次世界大戦以前のチェコスロヴァキア主義はむしろ、ハンガリー王国政府の圧力への対抗とスロヴァキア民族運動の活性化のためにチェコ側からの支援を求めたスロヴァキア人勢力が必要とした議論だった⁽⁵⁾。しかし、戦間期のチェコスロヴァキア主義の理解は一様ではなかった。大きく分けて、両民族は民族的にも同一の存在であるという理解と、両者の違いを認めつつも新国家形成のために政治的に提携するという理解が存在した。スロヴァキア人政治家の多くは後者の理解を採用したが、チェコ人政治家の間では前者の理解が多数を占め、スロヴァキア側との摩擦を生む。

そして、スロヴァキア人政治家間でのチェコスロヴァキア主義とスロヴァキア・ナショナリズムとの衝突は具体的にはスロヴァキア地域の地位を巡る論争として表面化した。つまり、一方に首都プラハを中心とする中央集権体制を支持し、スロヴァキアを単なる行政単位と理解するチェコスロヴァキア主義支持の中央集権派が存在する。他方にスロヴァキア人を独立した民族と認識し、スロヴァキア地域をスロヴァキア民族の領域と理解しつつスロヴァキア自治を求める自治派が存在する図式である。

この図式に基づき、戦間期のスロヴァキア政治の大枠は、一方に農業党や社会民主党など与党寄りのチェコスロヴァキア主義かつ中央集権派の政党があり、他方にスロヴァキア人民党やスロヴァキア国民党など野党のスロヴァキア・ナショナリストかつ自治派の政党が対置される二者対立の構造としてこれまで理解されてきた⁽⁶⁾。最近ではスロヴァキア地域における脱中央集権要求の程度の相違という視点に基づき、この区分を相対化する動きもあるが⁽⁷⁾、全国政党の農業党や社会民主党のスロヴァキア組織とスロヴァキア人民党との対比からスロヴァキア政治を説明する記述はいまだに多い。だが、諸政党が提示したスロヴァキアに関する諸構想を考察するならば、あるいは1920年代後半に農業党とスロヴァキア人民党が提携

5 Miroslav Pekník, “Cesty čechoslovakizmu pred prvou svetovou vojnou,” in Miroslav Pekník et al., *Pohľady na slovenskú politiku: Geopolitika – Slovenské národné rady – Čechoslovakizmus* (Bratislava: VEDA Vydavateľstvo Slovenskej akadémie vied, 2000), pp. 523–525; Jan Galandauer, “Přemena českého ‘čechoslovakizmu’ v období Velké války,” in Pekník et al., *Pohľady na slovenskú politiku*, p. 542.

6 この構図に基づき、戦間期のスロヴァキアの諸政党が提示した地方行政制度構想を扱った論文としては、Xénia Šuchová, “K vývinu názorov Ivana Dérera na riešenie postavenia Slovenska v republike v rokoch 1918–1938,” *Historický časopis* 40, no. 3 (1992), pp. 335–355; Xénia Šuchová, “Administratívna samospráva v koncepciách slovenských centralistov Milana Hodžu a Ivana Dérera,” *Historický časopis* 42, no. 2 (1994), pp. 226–244.

7 その一例として、Alena Bartlová, “Návrhy slovenských politických strán na zmenu štátoprávneho usporiadania ČSR v rokoch 1918–1935 a zapojenie HSLS do vládnej koalície v rokoch 1927–1929,” in Milan Zemko and Valerián Bystrický, eds., *Slovensko v Československu (1918–1939)* (Bratislava: VEDA Vydavateľstvo Slovenskej akadémie vied, 2004), pp. 123–164.

して州制度導入を支持した事例を考慮するならば、この対立のみからスロヴァキア政治の構図を説明することはできない。

ところで、中央集権制と官僚制に依拠する近代国家において、各国の首都は政治・行政の中枢として国土の中で枢要な地位を占める。また、ナショナリズムの高揚と権力側の利用に伴い、19世紀以降に国民国家へと編成された地域においては首都にはさらに文化生活や学問の中心地かつ発信地としての意味も付された。このように理解される首都は、それぞれの国民国家の住民や知識人が心の内に描く地図の重要な要素である。しかし、首都ないし中心都市に関してもスロヴァキアの経験は独特だった。1867年以降のオーストリア＝ハンガリー二重制期（以下「二重制期」とする）には、後のスロヴァキア領となる上部ハンガリー全域を管轄した行政と政治の中枢は、王国の首都であるブダペスト以外には存在しなかった。スロヴァキア地域の中心都市を巡る状況に関しても、チェコスロヴァキア建国が転機である。1919年2月初めに実施されたスロヴァキア統治全権大臣のブラチスラヴァ／プレスブルク⁽⁸⁾移動を契機として、1920年代前半には同市がスロヴァキアの行政や文化・教育の中枢として整備された。その後のブラチスラヴァは1928年7月にスロヴァキア州の州庁所在地に、1939年3月のスロヴァキア独立国の成立後には同国の首都となった。この経緯からはスロヴァキアという行政単位の成立過程とブラチスラヴァの地位強化の過程が並進したことを確認できる。確かに20世紀初頭のブラチスラヴァはハンガリー王国北西部の最大の都市であり、その点を重視するならばこの過程は自然に思える。しかし、戦間期以降のスロヴァキア領の最西端という地理的条件に加え、チェコスロヴァキア建国時には市の住民の多数派はドイツ系とハンガリー系だった。統計に基づくならば、自らの民族帰属をチェコスロヴァキア系⁽⁹⁾

8 本稿では同市について、原則として現在のスロヴァキア語名称に則り、「ブラチスラヴァ」[Bratislava]と記す。「ブラチスラヴァ」という市名はチェコスロヴァキアへの併合に伴い1919年初めに公式化され普及した名称であること、また第一次世界大戦前の同市がドイツ語の「プレスブルク」[Pressburg]やハンガリー語の「ポジョニ」[Pozsony]、スロヴァキア語の「プレシュポロク」[Prešporok]など言語によって異なる複数の名前と呼ばれていたことを考慮するならば、1919年2~3月に「ブラチスラヴァ」が公式採用される前の記述においてもブラチスラヴァの名称を使用することは不適切であるかとも思える。

しかし、同市のように言語によって異なる名称を有する都市や地方は現在でも多く、それらの名称の何れを採用しても、その言語集団ないし国家によるその土地の「所有」を支持する立場を示すことになろう。そのため、本稿では(1)現在のスロヴァキア共和国領内の地名と都市名に関しては、煩雑さを避けるために現在のスロヴァキア語名称で表記し、必要に応じてその他の言語による名称を補足する、(2)スロヴァキア領外の地名に関しても同様に現在の現地語名称を利用するが、「ウィーン」や「ブダペスト」など日本語に定着した地名表記はそのまま利用する、という二つの原則に基づいて地名表記を行いたい。

この原則に則り、1919年以前に関しても「ブラチスラヴァ」という名称を利用し、適宜その他の名称も補足したい。なお、史料からの引用に関しては当然ながら原史料で表記された地名をそのまま転記する。

9 戦間期のチェコスロヴァキア共和国の統計・国勢調査は、本文中で触れたチェコスロヴァキア主義に基づき、チェコ人とスロヴァキア人を同一のチェコスロヴァキア人として分類した。以下、本稿はチェコ人とスロヴァキア人とを総称するカテゴリーという意味で「チェコスロヴァキア系」という語を使用する。

と申告した住民数は戦間期に大幅に増加したが、ハンガリー系やドイツ系の影響を完全に排除するまでには至らなかった。それにもかかわらず、当時の行政制度構想の大多数においてブラチスラヴァがスロヴァキアの中心都市となることに対して反対を唱えた論は少ない。例えば、1922年にスロヴァキア人民党が国会に提出したスロヴァキア自治法案においても「ブラチスラヴァはスロヴァキアの中核都市 [sidelné mesto] である」⁽¹⁰⁾ と定義され、州政府と州議会の設置場所と想定されたのである。

以上の整理からは、フェドル・ルッペルトの中心都市論、具体的には中部スロヴァキアのマルティン⁽¹¹⁾を中心都市として支持する主張は、ブラチスラヴァの地位向上を当然視したスロヴァキア人知識人の主流派に対する少数派からの異議申し立てだったことが理解できる。

本稿の目的は、ルッペルトの中心都市論の分析を通じて、戦間期のスロヴァキア人知識人がスロヴァキアの中心都市に対して抱いた認識の相違や、その背後に存在する「スロヴァキア」の領域に関する相違を指摘することである。また、戦間期スロヴァキア政治との関連では、ルッペルトが政治的には農業党に所属しつつも、スロヴァキア国民党系の日刊紙『国民新聞』やスロヴァキア文化団体であるマティツァ・スロヴェンスカーが発行する月刊総合誌『スロヴァキア展望』誌に中心都市論を発表するなど、上記の二者対立を越えて人物だった点にも注目したい。この二者対立という理解が生まれた一因は、従来の先行研究において、当時の新聞や雑誌は各政党や政治家の意向を反映しているとの理解に基づきつつ、スロヴァキア地域に関する各紙の論考を扱ったことに求められる。だが分析対象の論点を限定した場合、各派が提示したスロヴァキア自治に関する主張や関係しか分析しえず、最初から各派の配置の描かれ方を限定することになる。これに対して本稿で扱うルッペルトは、文化人としての言論活動を通じて知識人の間で知られた人物であり、またより自由な立場から発表メディアの選択を行える立場にあった。実際に、スロヴァキア自治に対する是非、ないし脱中央集権の程度という議論の対立軸にとらわれずに彼が発表した中心都市論は、各紙での一定の反響を呼び起こした⁽¹²⁾。彼の中心都市論は、戦間期のスロヴァキア政治に関する二者対立の構図を相対化し、異なる角度からこの時期の政治的議論の構図を理解するための一つの手掛かりとして利用できる。この点もルッペルトに注目する理由である。

本稿は基本的には、戦間期のスロヴァキア語新聞と雑誌を主要な史料として利用する。ルッペルトの主な論考は『スロヴァキア展望』誌や『国民新聞』に発表され、後にその一部は小冊子にまとめられた。また、彼に対する反論や反応も同様にスロヴァキア語新聞や雑誌に発表され、他の様々な政治的論題と同様、スロヴァキア語メディアが議論の空間となった。本稿ではこれらの記事を史料として用い、議論の再構成と分析を行う。

10 1922年自治法案に基づく憲法修正案第5条第1項。“Návrh zákona na autonómiu Slovenska podatý,” *Slovák*, 29. 1. 1922, p. 3.

11 1951年以前のマルティンの正式名称はスロヴァキア語では「トゥルチアンスキ・スヴェティエー・マルティン」[Turčiansky Svätý Martin]、ハンガリー語では「トゥローツセントマルトン」[Turócszentmárton]である。しかし、本稿では煩雑さを避けるために、注8に記した原則に則り、「マルティン」と記載する。

12 チェコ人知識人によるルッペルトの中心都市論に対する批判的言及の一例は、*Bratislava: časopis učené společnosti Šafaříkovy* 1 (1927), pp. 112–113.

本稿に関係する主要な先行研究を紹介したい。ルッペルトの生涯に関する代表的研究に関しては、英国人研究者 T・D・マルジークがルッペルトと R・W・シートン＝ワトソンとの交友関係を軸に整理した論文⁽¹³⁾が存在する。だが、マルジーク論文以外ではルッペルトや彼の主張に関する研究は非常に少なく、この原因はルッペルトが宗教家として活動し、戦後の社会主義政権の迫害対象となった経歴を有し、社会主義期の歴史研究からは無視された存在だったことに求められる⁽¹⁴⁾。近年は再評価の動きもあるが、いまだに彼に関する研究は少ない。彼の中心都市論に関しては、スロヴァキア人歴史家の L・リプタークがブラチスラヴァの地位の変化を扱った論考⁽¹⁵⁾で触れるが、ブラチスラヴァの地位上昇に対する反対論の典型として紹介するのみであり、その背景となる地域認識までは踏み込んでいない。

次にブラチスラヴァ／プレスブルク研究であるが、同市の多民族性に着目した最近の研究では、19世紀後半のブラチスラヴァで展開した民族間関係を描く E・バベヨヴァーのモノグラフ⁽¹⁶⁾が存在する。バベヨヴァーは、近代化と工業化に伴う住民構成の変動を背景にブラチスラヴァ市内の諸民族や諸集団間の勢力関係の変動を動的に把握し、市当局や諸協会が押し進めたハンガリー化の試みと、従来のドイツ系エリートからの抵抗の諸相を具体的に記した。ルッペルトの中心都市論についても多文化的な同市に対する懐疑の一例として紹介した。また、戦間期の同市における多民族性は、G・ツォホ⁽¹⁷⁾編の論集⁽¹⁸⁾に所収された幾つかの論考が扱う。ブラチスラヴァのチェコスロヴァキア共和国への併合過程に関しては、社会主義期に史料集⁽¹⁹⁾が公開された他、日本では初代のスロヴァキア統治全権大臣である V・シロバルの活動を追う長興進の研究⁽²⁰⁾がある。その他、1919年初めの「ブラチスラヴァ」への改名の背景に市のスロヴァキア化に向けたチェコスロヴァキア当局の意図を見出した P・ブッゲの研究⁽²¹⁾やスロヴァキア全域の編入過程を論じた M・フロンスキーの研究⁽²²⁾

13 Thomas D. Marzik, "A Splendid Scottish-Slovak Friendship: R. W. Seton-Watson and Fedor Ruppeldt," in Mark Cornwell and Murray Frame, eds., *Scotland and the Slavs: Cultures in Contact 1500–2000* (Newtonville, MA: Oriental Research Partners, 2001), pp. 103–125.

14 Ibid., p. 105.

15 Lubomír Lipták, "Bratislava as the Capital of Slovakia," in Eubomír Lipták, *Changes of Changes: Society and Politics in the 20th Century* (Bratislava: Academic Electronic Press, 2002), pp. 95–114.

16 Eleonóra Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg: Conflict and Cultural Coexistence in Bratislava 1897–1914* (Boulder: East European Monographs, 2003).

17 本稿ではハンガリー人の人名はその他の欧州の人名と同様に「名」・「性」の順番で表記する。

18 Gábor Czoch, Aranka Kocsis, Árpád Tóth, eds., *Kapitoly z dejín Bratislavy* (Bratislava: Kalligram, 2006).

19 Vladimír Horváth, Elemír Rákoš, Jozef Watzka, eds., *Bratislava, hlavné mesto Slovenska: Pripojenie Bratislavy k Československej republike roku 1918–1919* (Bratislava: Vydavateľstvo Obzor, 1977).

20 長興進「シロバル博士の多忙な日々：スロヴァキア 一九一八—一九一九年」羽場久、尾子編『ロシア革命と東欧（叢書東欧4）』彩流社、1990年、61–80頁。

21 Peter Bugge, "The Making a Slovak City: The Czechoslovak Renaming of Pressburg / Pozsony / Prešporok, 1918–1919," *Austrian History Yearbook* 35 (2004), pp. 205–227.

22 Marián Hronský, *Boj o Slovensko a Trianon. 1918–1920* (Bratislava: Národné literárne centrum, 1998); Marián Hronský, *The Struggle for Slovakia and the Treaty of Trianon* (Bratislava: VEDA Vydavateľstvo Slovenskej akadémie vied, 2001).

などを指摘できる。しかし、以上の研究は何れもブラチスラヴァの地位上昇をある種の既定路線と描写する傾向がある。またリプタークは、先に紹介した論考では、第二次世界大戦後や1993年後をも視野に含む長期的視点からブラチスラヴァがスロヴァキアの首都として受容される過程を論じた。しかし、現在までのところ、バベヨヴァーとリプターク以外にルッペルトの中心都市論を議論する主要な研究は存在せず、ルッペルトの中心都市論と領域認識を採り上げる意味は依然として大きい。

最後に本稿の構成に触れたい。第1節では本稿の舞台となるブラチスラヴァとマルティン両市の20世紀初頭から戦間期にかけての状況を概観し、第2節ではルッペルトの略歴と中心都市に関する諸著作を整理する。続く二つの節では、同時代的な政治情勢と関連付けつつ中心都市論を詳細に分析する。第3節では、チェコスロヴァキア建国直後の情勢との関連から1918～1919年の議論を扱う。第4節では、1926～1928年の議論を当時進行中だった地方行政制度改革の議論と関連させつつ扱う。第5節では、第3節と第4節の分析に依拠し、ルッペルトの中心都市論の性格と彼が抱くスロヴァキアの領域に関する認識について考察したい。

1. ブラチスラヴァとマルティン

ブラチスラヴァは古くからの歴史を有する。ドナウ川に面し、なおかつハンガリー王国最西端という地勢上の重要地点に位置するため、ブラチスラヴァ城は既に王国の成立直後より重要な軍事拠点として強化され、市も1291年に国王都市として都市法を獲得した⁽²³⁾。16世紀前半のオスマン帝国による王国首都ブダとハンガリー平野部の占領後、1536年にブラチスラヴァは王国の首都と宣言された⁽²⁴⁾。その後二世紀以上もその地位を維持し、1830年に至るまで国王の戴冠都市だった。しかし、ブダの回復後の1783年には中央行政が、また1848年3月と4月の開催を最後に王国議会もブダに移転し⁽²⁵⁾、王国西部の地方拠点へと市の性格は大きく変化した。19世紀半ばに一時的な経済停滞も経験するが、近代化と工業化の進展を経て、世紀転換期にはブダペストに次ぐ工業都市となる。1918年までの行政制度ではブラチスラヴァは通常の市としては扱われず、県と同格のムニツィパル権を有する都市として県と同格の扱いを受けた(地図1参照)⁽²⁶⁾。また1914年には王国で三番目の大学が開設される⁽²⁷⁾など、王国内での文化的な地位も着実に向上した。

ブラチスラヴァの住民構成を考慮する際には、同市が北東からのスロヴァキア人居住地帯、市の南東に位置するジトニー島から伸びるハンガリー人居住地帯、そして西の下オーストリアからのドイツ人居住地帯が交わる地点に存在した事実が重要である⁽²⁸⁾。この分布を反映

23 Vladimír Horváth, Darina Lehotská, Ján Pleva, eds., *Dejiny Bratislavy* (Bratislava: Vydavateľstvo Obzor, 1978), pp. 44–45, 49.

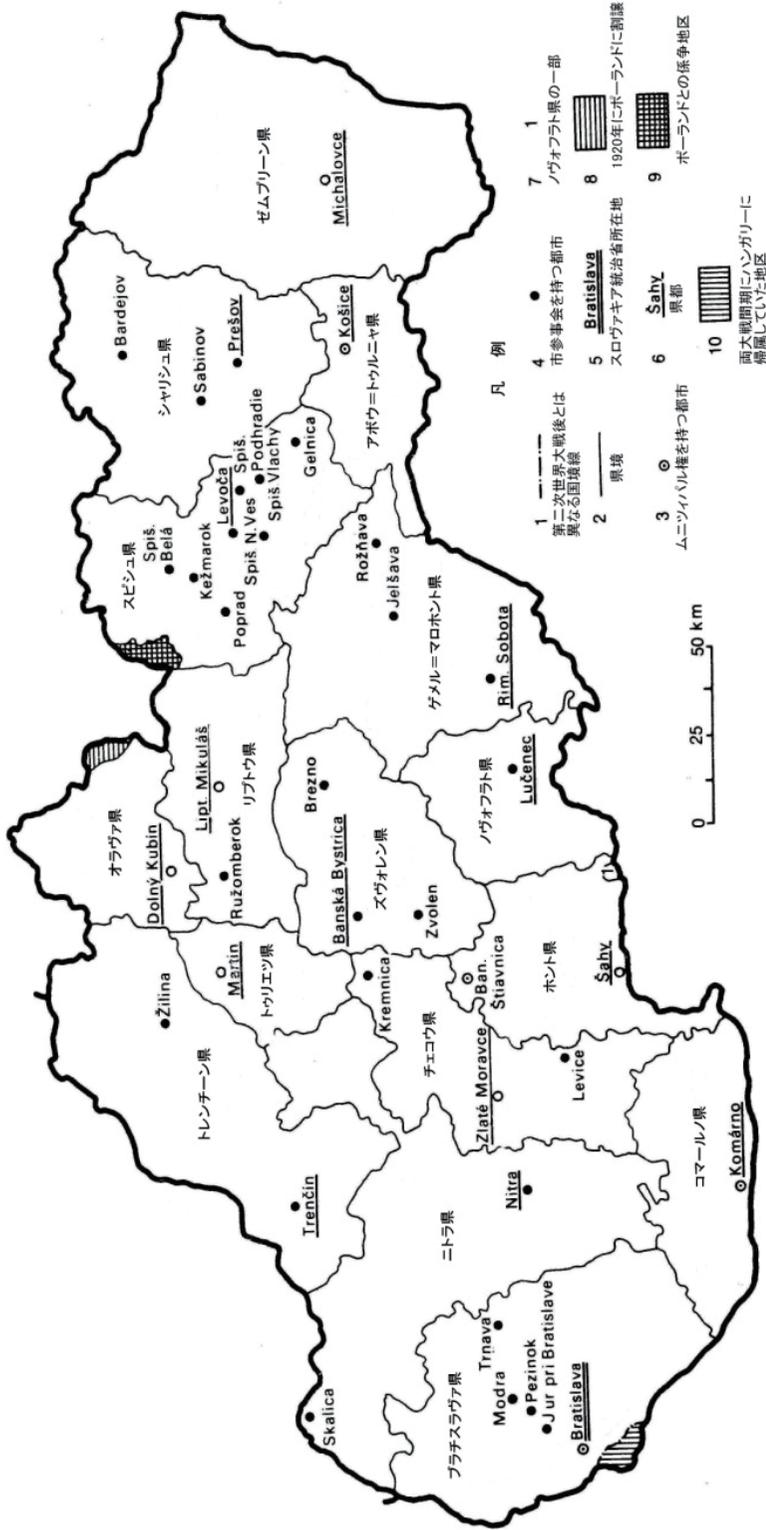
24 Ibid., p. 95.

25 Ibid., pp. 158–159.

26 Ibid., p. 165.

27 Ibid., p. 199.

28 Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, p. 25.



地図1：「スロヴァキア」地域におけるハンガリー王国時代からの県とその境界線（1920年の段階） 出典：Jozef Klimko, *Vývoj územia Slovenska a utváranie jeho hraníc* (Bratislava: obzor, 1980). (巻末の付図10より引用し、筆者が県名と凡例の日本語訳を行った。)

した同市は、ドイツ系、ハンガリー系、スロヴァキア系の三民族ないし三言語の使用者が居住する空間だった⁽²⁹⁾。バベヨヴァーによれば、市民間には多言語併用や市と王国への帰属心を基調とする「プレスブルク人」アイデンティティが存在したが、三者の関係は決して静的ではなかった⁽³⁰⁾。1880年の約48,000人の住民のうち、母語に基づきドイツ系と申告した住民は65.6%を占める最多数派であり、これに対してハンガリー系は15.7%、スロヴァキア系も15.7%を占めたに過ぎない。しかし、1910年の調査では約78,000人の住民のうちドイツ系が依然41.9%を占め、最多数派の立場を維持したが、ハンガリー系住民の比率も40.5%へと急増した（スロヴァキア系は14.9%へと微減）⁽³¹⁾。この増加は自然増のみからは説明しえず、住民流入とハンガリー化政策に伴うアイデンティティの転換の結果だと評価できる。また、住民の比率のみならず、言語間関係も19世紀後半に大きく変化した。二重制期初期にはドイツ語が市行政や文化生活上で優越した地位を保持していた。しかし、1869年設立のトルディ・サークルなどハンガリー系諸協会の活動⁽³²⁾や市当局の政策の結果、次第にこれらの領域におけるハンガリー語の流通範囲が拡大した。前述の大学開設もハンガリー語優位の構造を確立し、ブラチスラヴァを多文化ないし多言語併存の空間からハンガリー文化の拠点へと転換させる試みだった⁽³³⁾。これに対して、スロヴァキア語は市で流通する三言語の一つではあったが、市場での周辺農民との接触や家内奉公人との遣り取りに必要な言葉と認識されるなど社会的には一段低い立場に留まる⁽³⁴⁾。

だが、18世紀末から19世紀前半にかけてのブラチスラヴァは、スロヴァキア民族運動の拠点という役割を担った。ヨーゼフ二世により1784年に同市に設立された神学アカデミーやルター派のリセは、最初のスロヴァキア語文章語を編纂したA・ベルノラークらスロヴァキア人知識人の第一世代の活動拠点となった。続く1830年代にも、ブラチスラヴァは現代スロヴァキア語の原型となる新たな文章語の編纂者であり1848年革命時のスロヴァキア人の指導者となるL・シトゥールらの活動拠点だった⁽³⁵⁾。しかし、19世紀半ば以降、地方都市と化したブラチスラヴァは、スロヴァキア民族運動の拠点としての地位も低下させる。

他方、マルティンは、ハンガリー王国北部、ヴァーフ川上流域と支流のトゥリエツ川が形成する盆地に位置した。19世紀後半の行政制度ではマルティンはトゥリエツ県の県庁所在地だったが、ブラチスラヴァとは異なり都市の地位を有さない通常の自治体である（地図1

29 宗教面からみた場合、ローマ・カトリックやルター派、カルヴァン派の信徒に加えて、多数のユダヤ教徒がブラチスラヴァに居住していた。ブラチスラヴァは中欧地域におけるユダヤ教の主要拠点の一つだったが、彼らは母語別の住民構成調査では、当初はドイツ系、後にはハンガリー系を選択する傾向があったために、言語別の調査結果には表れにくい集団だった。Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, pp. 51–52.

30 Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, pp. 85–91.

31 *Ibid.*, p. 56.

32 ブラチスラヴァ市内のトルディ・サークルの活動に関しては Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, pp. 65–73 に詳しく記されている。

33 Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, pp. 167–170.

34 *Ibid.*, pp. 86–87.

35 Elena Mannová et al., *Krátke dejiny Slovenska* (Bratislava: Academic Electronic Press, 2003), pp. 204, 205; Bugge, “The Making a Slovak City,” (前注21参照) pp. 206–207.

参照)。経済的視点からは19世紀後半に敷設された幹線鉄道の存在が重要である。1872年にハンガリー国鉄がブダペストからズヴォレン、マルティンを経由してマルティン北郊のヴルトキへと伸びる幹線鉄道を完成させた⁽³⁶⁾。同鉄道の終点のヴルトキには、王国北東部のコシツェ⁽³⁷⁾を起点にオーストリア側のモラヴィア北部の都市ボフミーンに向けて王国北部を東西に横断するコシツェ＝ボフミーン鉄道が既に開通していた⁽³⁸⁾。マルティン自体は両鉄道の接続点ではないが、トゥリエツ地方は王国北部における移動と物流の結節点となり、経済的重要度が高まった。

19世紀後半のマルティンは、ブラチスラヴァに代わりスロヴァキア民族運動での役割を高めたが、その契機は1861年に「スロヴァキア民族の覚書」を採択した大衆集会の開催地となったことに由来する。スロヴァキア民族の権利に依拠しつつ、ハンガリー王国内でのスロヴァキア人自治地域「オコリエ」の設置を要求した「覚書」⁽³⁹⁾は、ハンガリー王国議会とハンガリー国王であるフランツ＝ヨーゼフの双方によって拒否された。しかし、国王フランツ＝ヨーゼフはスロヴァキア文化団体マティツァ・スロヴェンスカーの設置に関する特許状を下付した。1863年に活動を開始したマティツァはマルティンを本拠地を選び、スロヴァキア民族運動内でのマルティンの権威が強化される⁽⁴⁰⁾。1871年にはスロヴァキア民族運動家の結集政党であるスロヴァキア国民党が結成され、同じくマルティンに本部を置いた。二重制成立後の1875年にはハンガリー政府がマティツァ・スロヴェンスカーを閉鎖した。しかし、出版協会や博物館協会の本拠として、マルティンはその後もスロヴァキア民族運動と文化の中心地として地位を維持し続けた。この後、19世紀末にスロヴァキア国民党指導部は保守性を強め、スロヴァキア民族政治の刷新を求める勢力の自立化を招く。スロヴァキア人の自助努力を主張する諸派はマルティン以外を拠点として活動した。カトリック勢力や農業組合運動などが代表的な刷新勢力である。しかし、それら以外にもスロヴァキア人の社会民主主義運動も成長し、彼らの拠点は、急速に工業化を進め周辺部から多くのスロヴァキア人労働者を受け入れていたブラチスラヴァに置かれた⁽⁴¹⁾。それでもなお、ハンガリー王国の解体に至るまで、諸派はスロヴァキア国民党指導部との関係を維持した。また、1918年10月末にスロヴァキアのチェコスロヴァキアへの参加を求めたスロヴァキア国民会議もマルティンに召集されるなど、スロヴァキア民族運動の内部におけるマルティンの権威は王国の解体に至るまで動揺しつつも維持される。

第一次世界大戦とチェコスロヴァキア建国を経た後、1920年代前半のブラチスラヴァはスロヴァキア統治全権大臣の所在地として機能した。さらにスロヴァキアにおける県制度法施行に伴い、1923年にブラチスラヴァとマルティンはそれぞれ新たな県の県都となる⁽⁴²⁾。

36 Jiří Kubáček et al., *Dejiny železnic na území Slovenska*, 2nd ed. (Bratislava: Železnice Slovenskej republiky, 2007), p. 49.

37 当時のハンガリー語地名は「カッシャ」[Kassa]である。

38 Kubáček et al., *Dejiny železnic na území Slovenska*, p. 49.

39 František Bokes, ed., *Dokumenty k slovenskému národnému hnutiu v rokoch 1848–1914, I 1848–1867* (Bratislava: Vydavateľstvo Slovenskej akadémie vied, 1962), pp. 315–316.

40 Dušan Čaplovič, Viliam Čičaj, Dušan Kováč, Eubomír Lipták, Ján Lukačka, *Dejiny Slovenska* (Bratislava: Academic Electronic Press, 2000), pp. 196–197.

41 Eubomír Lipták et al., *Politické strany na Slovensku. 1860–1989* (Bratislava: ARCHA, 1992), pp. 83–88.

景観面ではブラチスラヴァは、ハンガリー人詩人のペティーフィ像やマリア＝テレジア像など、ハンガリー王国時代に建立されたモニュメントの除去や破壊、街路名の変更を通じたチェコスロヴァキア化を経験した⁽⁴³⁾。さらには人口構成の面でも大変動を経験する。1921年実施の国勢調査によれば市の総人口数は93,189人に成長し、87,621人の市民権保持者のうち、チェコスロヴァキア系の比率は42.2%にまで成長した。反面ドイツ系は29.5%、ハンガリー系は23.7%に減少した⁽⁴⁴⁾。さらにチェコスロヴァキア系と総称された人々の内訳をみた場合、チェコ系の比率は戦前には1.2%に過ぎなかったが、1921年には全住民の12.6%へと成長し、チェコスロヴァキア建国後のチェコ人教師や官僚、兵士の流入を統計的に裏付けている⁽⁴⁵⁾。1930年には市の総人口は123,844人にまで成長し、チェコスロヴァキア系の住民数は60,013人へと伸びた⁽⁴⁶⁾。他方でハンガリー系の人口は18,890人(16.6%)にまで下落し、戦間期のチェコスロヴァキアの法制で少数民族としての保護を得られる条件である住民比率20%の基準を初めて下回った⁽⁴⁷⁾。

政治的にはブラチスラヴァへの諸政党の本部や新聞編集部の集中も進み、同市はマルティンに代わるスロヴァキア政治の中心地となる。さらには、1919年のコメニウス大学の開設を契機に、スロヴァキアの教育・文化の中心地としても、マティツァ・スロヴェンスカーに依拠するマルティンの権威に挑戦する地位を得た。他方でブラチスラヴァには、戦間期のスロヴァキアにおけるハンガリー系主要政党であるキリスト教社会党の本拠が置かれた他⁽⁴⁸⁾、ブラチスラヴァ市議会選挙においてもキリスト教社会党やドイツ系政党などが多数の議席を獲得し続けた⁽⁴⁹⁾。

以上にまとめたように、戦間期のブラチスラヴァでは、チェコスロヴァキア化の進展にもかかわらず、ハンガリー系やドイツ系、ユダヤ系のいわゆる「旧住民」の影響力も保たれ、社会生活における多言語使用の状況も依然継続していたのである。

2. フェドル・ルッペルトと彼の諸論考

フェドル・ルッペルトは1886年にハンガリー王国北部リプトウスキー・ミクラーシュ⁽⁵⁰⁾のルター派教師の家庭に誕生した。父カロル・ルッペルトは教師として活動する傍ら、民俗

42 1920年成立の県制度法に基づく行政区分と県境については地図2を参照せよ。なお、県制度法はチェコ諸州でも施行が予定されていたが、国民民主党などの反対により施行されずに留まった。

43 Lubomír Lipták, “Monuments of Political Changes and political Changes of Monuments,” in Lipták, *Changes of Changes*, pp. 77–79.

44 Zemko and Bystrický, eds., *Slovensko v Československu*, (前注7参照) pp. 522–523.

45 László Szarka, “Etnické zmeny v Bratislave a mestská administratíva v období medzi svetovými vojnami,” in Czoch et al., eds., *Kapitoly z dejín Bratislavy*, p. 415.

46 Zemko and Bystrický, eds., *Slovensko v Československu*, pp. 535–536.

47 Szarka, “Etnické zmeny v Bratislave,” pp. 415–416.

48 Jiří Malíř et al., *Politické strany, Vývoj politických stran a hnutí v českých zemích a Československu 1861–2004, I. díl: období 1861–1938* (Brno: Nakladatelství doplněk, 2005), p. 928.

49 Szarka, “Etnické zmeny v Bratislave,” pp. 424–425.

50 当時のハンガリー語地名では「リプターセントミクローシュ」[Liptószentmiklós]である。

音楽の収集や合唱団活動を通じた民族活動にも尽力した知識人だった⁽⁵¹⁾。フェドルはハンガリー王国西部オーバーシュツェン（現在のオーストリア共和国ブルゲンラント州）のギムナジウムやショプロンのリセと神学アカデミーを経て、1907年から1911年にはウィーンやライプチヒ、ブダペストの大学で神学を修めた⁽⁵²⁾。この時期にルッペルトの生涯に大きな影響を及ぼす出来事が発生した。彼は1910年10月から翌年7月にかけて英国エディンバラに留学する機会を得たのである。これは、中欧に関心を抱く英国のジャーナリストであり、1908年に著作 *Racial Problems in Hungary*⁽⁵³⁾ を通じてハンガリー王国内のスロヴァキア人の状況を英語圏に紹介したロバート・W・シートン=ワトソンが、同書の出版を通じて得た印税をスロヴァキア人青年知識人の教育に還元するために企図した事業だった。ルッペルトはシートン=ワトソンから依頼を受けたアントン・シュチェファークとミラン・ホジャによって初回の留学生に選出された⁽⁵⁴⁾。留学後もルッペルトはシートン=ワトソンとの交友関係を終生維持し続ける⁽⁵⁵⁾。

ルッペルトは第一次世界大戦末期のスロヴァキア民族運動にも関与した。1918年5月1日のリプトウスキー・ミクラシュにおける社会民主党主催の集会と並び、チェコスロヴァキア建国に向けたハンガリー王国内のスロヴァキア人活動家の活性化への契機となった5月24日のマルティンでのスロヴァキア国民党の会議にはルッペルト本人は参加していないが、会議の議事録によれば、シュチェファークと共に宣伝用の小冊子を作製する役割を割り振られた⁽⁵⁶⁾。また、10月30日に召集されたスロヴァキア国民会議にはルッペルトも出席し、「スロヴァキア国民宣言」の署名者の一人となった⁽⁵⁷⁾。

戦間期のルッペルトは政治的には農業党に参加し、政府与党に近い立場を示した。しかし、1933年に前任議員の死去に伴い下院議員に繰り上げ当選し、1935年の選挙まで務めた以外には議会政治には深く関与していない。彼は、1921年以降ジリナのルター派教会の牧師として、また国際的な宗教会議におけるチェコスロヴァキア代表として活動した⁽⁵⁸⁾。ま

51 *Encyklopédia Slovenska Zväzok V R-Š* (Bratislava: VEDA Vydavateľstvo Slovenskej akadémie vied, 1981), p. 174. また、チェコスロヴァキア建国直後に初代のスロヴァキア統治全権大臣を務めたヴァヴロ・シロバルは建国の時期を扱った回想録において、ハンガリー王国内務省の監視対象者リストを基に、第一次世界大戦以前からのスロヴァキア民族活動家約500名を列挙したりリストを作成した。このシロバルのリストにもカール・ルッペルトの名は現れており、彼がスロヴァキア民族主義者として活動していた形跡を伺える。Vavro Šrobár, *Osvobodené Slovensko. Pamäti z rokov 1918–1920, zväzok I* (Praha: Čin, 1928), p. 175.

52 *Encyklopédia Slovenska Zväzok V*, p. 174.

53 Scotus Viator (pseud. Robert W. Seton-Watson), *Racial Problems in Hungary* (London: Archibald Constable & co, 1908).

54 Marzik, “A Splendid Scottish-Slovak Friendship,” (前注13参照) pp. 107–108.

55 両者の間で交わされた書簡の一部は、Jan Rychlík, Thomas D. Marzik, Miroslav Bielík, eds., *R. W. Seton-Watson a jeho vzťahy k Čechom a Slovákom. Dokumenty 1906–1951. I–II*. (Praha: Ústav T. G. Masaryka, 1995) にも収録されている。

56 Karol A. Medvecký, *Slovenský prevrat. III, Dokumenty* (Bratislava: Komenský Vydavateľská a literárna spoločnosť, 1931), p. 347.

57 *Ibid.*, p. 355.

58 Marzik, “A Splendid Scottish-Slovak Friendship,” pp. 120–121.

た、英語の知識を活かし、マーク・トウェインらの英米文学をスロヴァキア語に翻訳し紹介した他、戦間期にシートン＝ワトソンが出版したスロヴァキアに関する二つの著作の出版にも協力した⁽⁵⁹⁾。1924年に出版された *New Slovakia*⁽⁶⁰⁾ ではスロヴァキア語への訳者を務め、1931年出版の *Slovakia Then and Now* では一部の論考の英訳を担当した他、彼自身もスロヴァキアのルター派に関する論考を記した⁽⁶¹⁾。

以上のように、ルッペルトは戦間期のスロヴァキアにおいて宗教と英語の知識を用いつつ第一線で活動した一知識人だった⁽⁶²⁾。そのルッペルトが両大戦間期に繰り返し提示した主要な文化的政治的な主張こそ、本稿が目指す中心都市論である。

彼の中心都市論は、主に1919年から第二次世界大戦直後にかけて発表された八本の論考において論じられた。発表順に並べると、(1)1919年3月公刊の『スロヴァキアの中心都市』⁽⁶³⁾、(2)1919年5~6月に『国民新聞』に掲載された論考「中心都市の問題」⁽⁶⁴⁾、(3)1926年に『スロヴァキア展望』誌4月号に掲載された後に⁽⁶⁵⁾、小冊子化された『スロヴァキアの集中』⁽⁶⁶⁾、(4)同じく1926年の『スロヴァキア展望』誌6~8月合併号に掲載された「民族的集約」⁽⁶⁷⁾、(5)1927年の『スロヴァキア展望』誌1・2月合併号に掲載後⁽⁶⁸⁾に小冊子化された『民族の心臓』⁽⁶⁹⁾、(6)1927年5~6月に『国民新聞』に掲載された論考「スロヴァキアの大学」／「スロヴァキアの集中と大学」⁽⁷⁰⁾、(7)1928年2~3月の『国民新聞』への掲載後⁽⁷¹⁾に

59 Ibid., pp. 121–122.

60 Robert W. Seton-Watson, *Nové Slovensko (New Slovakia)* (Praha: Fr. Borový, 1924).

61 Fedor Ruppeldt, “The Lutheran Church in Slovakia,” in Robert W. Seton-Watson, ed., *Slovakia Then and Now: A Political Survey* (London: Allen & Unwin Ltd., 1931), pp. 191–208.

62 本稿で扱う時期の後のルッペルトにも手短かに言及したい。第二次世界大戦期のルッペルトはスロヴァキア独立国政府からは距離を置いた。さらには反独立国の抵抗運動に参加し、スロヴァキア国内の強制収容所への収監も経験する。第二次世界大戦後のチェコスロヴァキアでは非共産党系のスロヴァキア人政党である民主党に参加したほか、1947年から1952年にかけてジリナに本拠を置くルター派教会西部管区の監督職を勤めている。1952年に現役を退き年金生活に入った後、1979年に死去した。

63 Fedor Ruppeldt, *Hlavné mesto Slovenska* (Turčiansky Sv. Martin, 1919).

64 Fedor Ruppeldt, “Otázka hlavného mesta,” *Národné noviny [NN]*, 18. 5. 1919, p. 3; *NN*, 21. 5. 1919, p. 3; *NN*, 25. 5. 1919, p. 3; *NN*, 28. 5. 1919, p. 5; *NN*, 1. 6. 1919, pp. 3–4; *NN*, 4. 6. 1919, p. 3.

65 Fedor Ruppeldt, “Koncentrácia Slovenska,” *Slovenské pohľady* 42, no. 4 (1926), pp. 224–234.

66 Fedor Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska: Úvodné slovo ankety “Slovenských pohľadov” o tomto predmete* (Turčiansky Sv. Martin, 1926).

67 Fedor Ruppeldt, “Národná koncentrácia (Štúdiá o otázke koncentrácie Slovenska),” *Slovenské Pohľady* 42, no. 6–8 (1926), pp. 442–478.

68 Fedor Ruppeldt, “Srdce Národa,” *Slovenské Pohľady* 43, no. 1–2 (1927), pp. 70–86.

69 Fedor Ruppeldt, *Srdce Národa* (Turčiansky Sv. Martin, 1927).

70 Fedor Ruppeldt, “Slovenská univerzita,” *NN*, 13. 5. 1927, pp. 1–2; *NN*, 15. 5. 1927, p. 1; “Slovenská koncentrácia a univerzita,” *NN*, 18. 5. 1927, pp. 1–2; *NN*, 20. 5. 1927, pp. 1–2; *NN*, 22. 5. 1927, pp. 1–2; *NN*, 25. 5. 1927, pp. 1–2; *NN*, 27. 5. 1927, p. 4; *NN*, 29. 5. 1927, p. 2; *NN*, 1. 6. 1927, p. 2.

71 Fedor Ruppeldt, “Krajinská správa a koncentrácia,” *NN*, 5. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 8. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 10. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 12. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 15. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 17. 2. 1928, pp. 1–2; *NN*, 19. 5. 1928, pp. 2–3.

小冊子化された『州行政と集中』⁽⁷²⁾、(8) 1945年8月に執筆され独立した小冊子として出版された『今のみの好機』⁽⁷³⁾である⁽⁷⁴⁾。

以上の書誌からは、ルッペルトが政治的には農業党に近い立場にありながらも『スロヴァキア日報』など同党系の新聞を用いず、野党のスロヴァキア国民党系の『国民新聞』とマティツァの雑誌『スロヴァキア展望』誌を主な発表の場としたことが判る。このような彼の政治的な主張と発表の場に見られる捻れに関しては第4節で考察したい。

また、これらの諸論考は執筆時期の見地からは大きく二分できる。つまり、(a) 1919年に公表された(1)・(2)と、(b) 1920年代後半に発表された(3)～(7)である⁽⁷⁵⁾。この時期はそれぞれ、(a) ブラチスラヴァないしスロヴァキア地域のチェコスロヴァキア共和国への併合の時期と、(b) 1925年11月の国会議員選挙から1928年7月の州制度導入までのスロヴァキアの地方行政制度が議論された時期と重複する。彼はチェコスロヴァキア国内においてスロヴァキア地域の地位が大きく問題となった時期に中心都市論を提示し、世論に訴えたのである。

以下の第3節と第4節では、これら二つの時期のスロヴァキアやブラチスラヴァを取り巻く状況と関連させつつ、ルッペルトの議論を分析したい⁽⁷⁶⁾。

3. 1918～1919年の中心都市論

3-1. チェコスロヴァキア共和国建国直後のスロヴァキアとブラチスラヴァをめぐる情勢

確認となるが、チェコスロヴァキア建国直後の1919年に発表されたルッペルトの中心都市論の背景には、1918年秋のハプスブルク君主国の崩壊後、チェコスロヴァキア国家によるスロヴァキア地域の実効支配確立と新たな境界線の画定、チェコ諸州との関係強化という新国家全体の利害に関する問題が存在していた。彼は情勢を考慮しつつ、マルティンをスロヴァキアの中心都市へと整備することを主張した。それゆえ、ここでは1918年から1919年にかけてのスロヴァキアとブラチスラヴァを取り巻く情勢を確認したい。

スロヴァキア地域のチェコスロヴァキア国家への編入は、1918年10月30日にマルティンに集合したスロヴァキア人政治家がスロヴァキア国民会議を結成し、「スロヴァキア国民

72 Fedor Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia* (Turčiansky Sv. Martin, 1928).

73 Fedor Ruppeldt, *Teraz alebo nikdy* (Turčiansky Sv. Martin: Svet, 1945).

74 また、1928年にルッペルトはチェコスロヴァキア建国までのスロヴァキア人の文化運動をマルティンへの勢力集中が進む過程とみなす視点から描写した『1918年までのスロヴァキア人の集中に向けた努力：スロヴァキア人の文化史に寄せる論考』Fedor Ruppeldt, *Koncentračné snahy slovenské do roku 1918: Príspevky ku kultúrnej histórii Slovákov* (Turčiansky Sv. Martin, 1928)を出版した。この著作は、スロヴァキア民族運動におけるマルティンの意味を強調することで、中心都市論を補強する意図を有する。しかし、中心都市論自体を扱うものではないために、本稿の主要な分析対象からは外したい。

75 なお、(8)に挙げた1945年の『今のみの好機』執筆時の時代背景は本稿が対象とする1920年代とは大きく異なるため、本稿の主要な分析対象からは外し、今後の課題としたい。

76 なお、本稿ではルッペルトの著作で小冊子化されたものについては原則的に小冊子を史料とする。

宣言」⁽⁷⁷⁾を通じてチェコスロヴァキア国家への参加の意思を表明したことで開始された。

一方で、ブダペストにおける政変の結果、10月31日にはハンガリー人自由主義貴族であるミハイ・カーロイ伯を首班とするハンガリー新政権が成立した⁽⁷⁸⁾。戦前よりハンガリー王国内の民族問題に関心を抱いていたオスカー・ヤーシも少数民族問題担当大臣として新政権に入閣し、国内の各民族組織との交渉を開始した。しかし、ハンガリー政府は諸民族の自決権に基づく自治州設置を提案しつつも、同時に第一次世界大戦以前のハンガリー王国領の維持を目標に掲げ、チェコスロヴァキアへの参加とハンガリーとの友好的な隣国関係を求めるスロヴァキア側の立場とは大きく擦れ違った⁽⁷⁹⁾。この後、11月中旬に再編されたハンガリー軍によるスロヴァキア再進駐が開始され、スロヴァキアの帰属をめぐる紛争が本格化した。また、スロヴァキア各地ではスロヴァキア人の地方国民会議などが設立され、治安維持や生活必需品の配給などを担当したが、ハンガリー人側も同様の組織を設立したため、スロヴァキア国民会議の権威が及ぶ範囲は中部スロヴァキアのみ限定された⁽⁸⁰⁾。ブラチスラヴァにおいても1919年年頭のチェコスロヴァキア軍進駐に至るまで、ドイツ系住民とハンガリー系住民が組織した国民会議が市行政を維持した⁽⁸¹⁾。

1918年末にかけてスロヴァキア情勢は混迷を深めるが、この時期にはスロヴァキアをめぐる四つの権力中枢が存在していた。列挙すると、(1)交渉と武力を通じた上部ハンガリーないしスロヴァキアの維持を目指すブダペストのハンガリー政府、(2)スロヴァキア政治家が結集したマルティンのスロヴァキア国民会議、(3)チェコ諸州の権力掌握後、スロヴァキアの実効支配に向けた独自行動を開始したプラハのチェコスロヴァキア政府、そして(4)チェコスロヴァキア政府のスロヴァキアにおける出先組織として1918年12月に活動を開始したスロヴァキア統治全権大臣(これについては後述する)の本拠であるジリナ(地図1参照)の四ヶ所である。

これらの権力中枢のうちマルティンのスロヴァキア国民会議が一番弱い立場にあった。11月半ばには、ハンガリー軍のマルティン再進駐と指導者の拘禁に伴いスロヴァキア国民会議は一時的に活動を停止する。この後のスロヴァキア情勢はハンガリー政府とチェコスロヴァキア政府との間の紛争として展開した。その際、チェコスロヴァキア政府はチェコ国内の部隊に加えて、イタリアから移送されたチェコスロヴァキア軍団をスロヴァキア進駐へと投入し、実効支配の確立を進めた。最終的には、1918年12月末までにチェコスロヴァキア軍がスロヴァキアのほぼ全土に進駐し、チェコスロヴァキア国家はスロヴァキア地域を統治下に置いた⁽⁸²⁾。12月初めにはスロヴァキア地域の移行措置を定めた1918年法令集第64号法の

77 スロヴァキア国民宣言の日本語訳は、歴史学研究会編『世界史史料10 二〇世紀の世界I ふたつの世界大戦』岩波書店、2006年、61-62頁(訳者は長興進)に所収されている。

78 Jörg K. Hoensch, *A History of Modern Hungary 1867-1994* (London: Longman, 1996), pp. 82-83.

79 Hronský, *The Struggle for Slovakia*, (前注22参照) pp. 61-62.

80 Ibid., pp. 66, 79.

81 Miroslav Kropilák, "Začlenenie Bratislavy do Československa po prvej svetovej vojne," in Horváth, et al. eds., *Bratislava, hlavné mesto Slovenska*, (前注19参照) pp. 21-23.

82 チェコスロヴァキア軍のスロヴァキアへの進駐の経過に関してはHronský, *The Struggle for Slovakia*, pp. 131-152に詳細に記されている。

第14条⁽⁸³⁾に基づき、スロヴァキア統治全権大臣職が設置され、ヴァヴロ・シロバルが大臣に任命された。彼はスロヴァキア人知識人から選抜された政府委員などのスタッフや軍部隊と共に12月12日にスロヴァキア北西部のジリナに着任し、スロヴァキアの実効支配の確立に向けた精力的な活動を開始した。

以上に概観したスロヴァキア情勢の中、1918年12月にはスロヴァキア統治全権大臣の本拠地の移転が具体的問題として浮上する。初代の統治全権大臣を務めたシロバルは戦前からのチェコスロヴァキア提携の主張者でもあり、戦争中よりチェコスロヴァキア建国を見据えてチェコ側との接触を開始していた。回想録によれば、彼は戦争中には西南部のニトラを戦後のスロヴァキア行政の中心として構想していた⁽⁸⁴⁾。選択の理由として、シロバルは古都ニトラ⁽⁸⁵⁾が有する伝統に加えて、同市が豊かな農業地帯に位置していることとハンガリー人などの非スロヴァキア人住民が多い西スロヴァキアを監督しうる位置にあることを指摘する。彼は幹線鉄道との接続がない点をニトラの短所として認めたが、これは戦後の鉄道建設によって補えるとも述べた。実際に1917年にはシロバルはニトラを訪問し、政府機関の設置に十分な建物が存在するとの印象を残した⁽⁸⁶⁾。

しかし、1918年12月に、ジリナでの統治全権大臣の活動を開始した直後に要員の勤務場所と住宅不足の問題が露見し、その解決が急務となった際には、ニトラは移動先の選択肢とはならなかった。また12月末にはマルティンへの移転も打診されたが、同地のトゥリエツ・スロヴァキア国民会議はジリナと同様の住宅不足を理由として否定的回答を返した⁽⁸⁷⁾。この時、新たにブラチスラヴァ県知事に任命されたサムエル・ゾフは、ブラチスラヴァ市の収容余力を報告した。この報告書を容れたシロバルは、1919年1月1日のチェコスロヴァキア軍のブラチスラヴァ進駐⁽⁸⁸⁾を受け、同市へのスロヴァキア統治全権大臣の移動を決定した⁽⁸⁹⁾。さらに、1月18日に同市をスロヴァキアの「首都」として公表し、2月4日に移動を実施した⁽⁹⁰⁾。他方、ブラチスラヴァへの統治全権大臣移動に反対する同市のハンガリー系とドイツ系住民は2月3日にゼネストを開始した⁽⁹¹⁾。さらに2月12日には軍と住民との衝突が発生し、死者も生じた⁽⁹²⁾。市内には根強い抵抗が残されていたのである。この後、

83 Zákon ze dne 10. prosince 1918 o mimořádných přechodních ustanoveních na Slovensku. [Zákon č.64/1918 Sb. z. a n.]

84 Vavro Šrobár, *Oslobodené Slovensko. Pamäti z rokov 1918–1920, zväzok II* (Bratislava: Academic Electronic Press, 2004), p. 12.

85 ニトラは9世紀のモラヴィア国期に最初のキリスト教教会が建立された場所だとみなされており、「伝統」という表現にはハンガリー人の移動以前のスラヴ人の居住とキリスト教の伝統を担う都市という認識が含意されている。

86 Šrobár, *Oslobodené Slovensko. II*, pp. 12–13.

87 Lipták, “Bratislava as the Capital of Slovakia,” (前注15参照) p. 98; Bugge, “The Making a Slovak City,” (前注21参照) p. 218.

88 Hronský, *The Struggle for Slovakia*, p. 149.

89 Lipták, “Bratislava as the Capital of Slovakia,” p. 99; Bugge, “The Making a Slovak City,” p. 218.

90 Šrobár, *Oslobodené Slovensko. II*, pp. 13–14.

91 Ibid.

92 Ibid., pp. 29–31.

同市の「ブラチスラヴァ」への改称が決定され、3月27日には官報を通じて公布された⁽⁹³⁾。

この経緯に見られるように、軍司令官からの反対⁽⁹⁴⁾を押し切りつつも、シロバルがブラチスラヴァへの統治全権大臣の本拠移転を強行した直接的理由は住宅問題に求められる。だが、彼の回想によれば、ブラチスラヴァはスロヴァキア域内の最大の都市、かつドナウ川の河川港を擁する戦略拠点だった。さらに彼は同市をドナウの支流と本流に挟まれたジトニー島の領有に向けた要石とも位置付け、領有の意思を示すためにもブラチスラヴァ確保の必要を論じた⁽⁹⁵⁾。この考えはシロバル個人のみが抱いたものではない。1919年1月に開会したパリ講和会議にチェコスロヴァキア政府が提出し、領土要求に関して論じた第二覚書がその例証である。第二覚書は、南部スロヴァキア一帯を元来スロヴァキア人が多数居住していたが、19世紀後半のハンガリー王国政府のハンガリー化政策を経てハンガリー人が多数化した地域と認識しつつ、南部スロヴァキアの領有を主張した⁽⁹⁶⁾。その上で1918年当時のブラチスラヴァ市内の住民の多数派はドイツ系とハンガリー系であると認めつつも、「しかし〔ブラチスラヴァ市の〕郊外と後背地の全域はスロヴァキア的である。市は数百年にもわたってスロヴァキア的な都市である」（引用文中の亀甲括弧内は筆者による補足、以下同様）と論じ、住民構成の面から同市の帰属とスロヴァキアの中心都市という地位の付与を説明する⁽⁹⁷⁾。さらに、「チェコスロヴァキア国家にとってのドナウはその政治的・経済的な構造の総体を支える支柱である」⁽⁹⁸⁾と述べつつ、同覚書はドナウ川に面した拠点と河川港の獲得要求を正当化した。

このように統治全権大臣の移転は、住宅不足という実際的理由やシロバル個人の判断のみに基づく決定ではなかった。スロヴァキア地域で最大の都市かつ経済活動の拠点であるブラチスラヴァの確保という経済的理由や、さらには南部スロヴァキアの領有の既成事実化とパリ講和会議への提示という外交戦略の考慮が移転の背景に存在していたのである。

93 Bugge, "The Making a Slovak City," pp. 220–221.

94 Šrobár, *Oslobodené Slovensko. II*, p. 14.

95 Ibid. また、シロバルは同じ個所において、1918年12月初めにブダペストにおいて合意されたチェコスロヴァキア - ハンガリー間の暫定休戦ライン（いわゆる「ホジャ＝バルタ・ライン」）の影響も示唆している。これはチェコスロヴァキア政府の特使として派遣されつつも後に事実上解任されたミラン・ホジャとハンガリー政府のアルベルト・バルタ軍事大臣との間で合意された境界線だが、ドナウ本流の北側に設定され、ブラチスラヴァをハンガリー領に残すなど、チェコスロヴァキアにとって不利な境界だった。この境界線は、ベネシュ外相による協商国への働きかけの結果、1918年末に協商国がドナウ本流を両国間の休戦ラインとし、ハンガリー政府に通告したことによって撤回された。しかし、その後もハンガリー政府はスロヴァキア人政治家と合意したスロヴァキアの南部境界としてホジャ＝バルタ・ラインを宣伝に利用し続ける。このような事情を考慮しつつ、ホジャ＝バルタ・ラインの設定によりホジャが犯した「失策」を是正するための努力としてもシロバルはブラチスラヴァへの統治全権大臣移転を正当化したのである。

96 Herman Raschhofer, *Die tschechoslowakischen Denkschriften für Friedenskonferenz von Paris 1919 / 1920* (Berlin: Carl Heymanns Verlag, 1937), pp. 50/51–52/53.

97 Ibid., p. 52/53.

98 Ibid.

3-2. トウリエツ・スロヴァキア国民会議とルッペルトの『スロヴァキアの中心都市』

3-1. で説明したスロヴァキア統治全権大臣のブラチスラヴァ移動に向けた動きに直面して、一度はマルティンへの移動に対して否定的回答を示したトウリエツ・スロヴァキア国民会議は態度を転換し、マルティンへの移動を要求する。ルッペルトが執筆した論考『スロヴァキアの中心都市』は政府に対するトウリエツ・スロヴァキア国民会議の覚書として1918年12月30日に採択され、翌1919年3月に正式に政府に提示された⁽⁹⁹⁾。以下では『スロヴァキアの中心都市』における議論を分析したい。

論考『スロヴァキアの中心都市』で展開される彼の議論は大きく三分できる。まず、スロヴァキアの中心都市の要件が提示され、トウリエツ地方ないしマルティンに中心都市を設定する理由が列挙される。次に新たな中心都市となるマルティンの再開発の概要が提示され、最後に移行措置が説明される。本稿では特に中心都市の要件に注目する。

ルッペルトは論考の冒頭で、原則的な条件として、国家の首都を国土の地理的な中心に置く必要性と、さらに国内各地と近隣諸国との連絡に適した地点、特に鉄道連絡の要衝に置く必要性を指摘する⁽¹⁰⁰⁾。この議論を筆者は「中心論」と名付けたい。

彼はこの条件をスロヴァキアに適用し、スロヴァキアの国土と鉄道路線網の中心という条件を兼ね備える地を探索する。彼が注目したのは、第1節で紹介した二つの幹線鉄道、すなわちヴルトキからズヴォレンを経由してブダペストに向かう鉄道路線と、コシツェーボフミーン鉄道（及びジリナで同鉄道に接続しヴァーフ川沿いを南西にブラチスラヴァに下る鉄道）である。彼は両鉄道をスロヴァキアの南北と東西を貫く大動脈として重視し、両鉄道の接続点であるトウリエツ地方こそがスロヴァキアの地理的中心であるとの結論を導く⁽¹⁰¹⁾。彼は特にコシツェーボフミーン鉄道をスロヴァキアとチェコ諸州及びプラハとを連絡する重要幹線としても強調し、厳密にはスロヴァキアの地理的中心よりも北西に寄った場所であるトウリエツをスロヴァキアの中心都市に相応しい場所として正当化するためにも同鉄道に言及した。

また、ルッペルトは、スロヴァキア民族の居住地の中心であり、かつ19世紀半ば以降のスロヴァキア人の文化運動の中心地という民族的条件からもトウリエツをスロヴァキアの中心都市の立地点に相応しい地方と認識した。彼はトウリエツないしマルティンを地理的かつ民族的な「二重の中心」という条件を満たす場所と認識したのである⁽¹⁰²⁾。

これに対して「プレシュポロク」（ブラチスラヴァ）が域内最大の都市であり、なおかつドナウを介した近隣諸国との連絡にも適した位置に所在した事実は彼も認めた。しかし、他方で彼は、同市を地理的にはスロヴァキアの辺境に存在し、かつハンガリー化された都市であると解釈した。彼はいわば二重の辺境である同市をスロヴァキアの中心都市の要件を満たさない都市として退けたのである⁽¹⁰³⁾。また、彼はブラチスラヴァと東スロヴァキアとの距離にも注目した。彼は、西端に位置した同市を、東スロヴァキアから遠く、独自意識を保ち

99 Ruppeldt, "Otázka hlavného mesta," *NV*, 18. 5. 1919, p. 3.

100 Ruppeldt, *Hlavné mesto Slovenska*, p. 7.

101 *Ibid.*, pp. 16–17.

102 *Ibid.*, p. 23.

103 *Ibid.*, pp. 27–29.

建国直後にはハンガリー政府主導の分離工作も実施された東部⁽¹⁰⁴⁾への影響力を有さない都市と評価した。それゆえ、ブラチスラヴァがスロヴァキア行政の中心地となった場合、東部をスロヴァキア人の共同体へと組み込む際の障害になると彼は論ずる。

続く部分でルッペルトは、マルティンとヴルートキを核にしたトゥリエツ盆地の新都建設計画を提案した。彼の構想に基づく新都は、盆地内に散在する町村を公共交通機関によって結びつけて構築される職住接近の衛生的な田園都市であり、それ自身、人口過密や劣悪な居住環境など当時の大都市が抱えていた社会病理に対する是正策として提案された⁽¹⁰⁵⁾。また、新都からスロヴァキア各地への利便を確保するためにマルティンから放射状に各地へと至る補完的な鉄道線の新設も提言するなど、彼の建設計画は野心的な側面も含む。ルッペルトは、建設事業の実施を通じて、貧しく失業率の高い中部スロヴァキアにおいて新たな産業が育成されることを新都建設の利点として掲げ、住民の経済的状況の改善が見込まれる意義を強調した⁽¹⁰⁶⁾。この点は第4節で扱う1920年代後半の諸論考に継承される。

以上にまとめたように、論考『スロヴァキアの中心都市』の内容には、1920年代後半に提示される議論である「集中論」の萌芽も認められるものの、主に民族と国土の中心としてマルティンを強調する「中心論」に依拠した議論が組み立てられたと言えよう。

前述のように彼の論考はトゥリエツ・スロヴァキア国民会議の覚書として採択された。そして、1919年3月にかつてのトゥリエツ・スロヴァキア国民会議系の人物を中核とするマルティン代表団がブラチスラヴァとプラハに派遣された折に、政府要人に対して実際に提示された。代表団は、ブラチスラヴァにおいてスロヴァキア統治全権大臣のシロバルと面会し⁽¹⁰⁷⁾、続いてプラハではシュヴェフラ内相やラシーン蔵相らの政府閣僚やマサリク大統領と面会し⁽¹⁰⁸⁾、それぞれマルティンの中心都市化への理解を求めた。代表団訪問の結果、各人からはマルティンが果たした文化的意義への賛意と今後の発展に向けた支援に関する言質を得られた⁽¹⁰⁹⁾。しかし、スロヴァキア政府移転と新都建設の要求に関しては何らの進展を見ていない。この点に関して、代表団の動きを逐一報告していたマルティンの『国民新聞』の4月9日付一面紙面に掲載された記事の文面は興味深い。この論考は「マルティン市民もまた、

104 Ibid., pp. 28, 31. また、実際に1918年11月4日には、親ハンガリーの姿勢を示していたジャーナリストであるV・ドヴォルツァクらが中心となり、東部のプレショウで「東スロヴァキア会議」が設立され、12月11日にはコシツェにおいて「スロヴァキア人民共和国」が宣言された。彼らの目標は東部のチェコスロヴァキアからの分離とハンガリーへの残留だったが、東進してきたチェコスロヴァキア軍の進駐により彼らの行動は抑えられた。しかし、ドヴォルツァクらは東スロヴァキアの言語的・文化的な独自性に依拠しつつ「スロヴァク人」の自決権主張を彼らの行動の根拠として用い、この後もハンガリーを拠点に東スロヴァキアの分離を目指した活動を継続した。ルッペルトは明言していないが、東スロヴァキアに対する危機感の背景にはドヴォルツァクらの活動があったと考えられる。Peter Švorc, “Prouhorské integračné snahy na území Slovenska na konci roku 1918,” *Historický časopis* 47, no. 1 (1999), pp. 44–55.

105 Ruppeldt, *Hlavné mesto Slovenska*, pp. 39–41.

106 Ibid., pp. 43–44.

107 “Za Turčiansky Sv. Martin,” *NN*, 11. 3. 1919, p. 1.

108 “Za hlavné mesto Slovenska Turčiansky Sv. Martin,” *NN*, 11. 3. 1919, p. 1.

109 “Za Turčiansky Sv. Martin,” *NN*, 20. 3. 1919, pp. 1–2.

自分たちの代表団がマルティンに関する完全な約束、すぐにスロヴァキアの中心都市になるというような約束をもたらすとは考えていなかったと思え、また、自分たちの指導者の次のような言葉以上にマルティン市民を驚かすものはなかったと思える。つまり、『用意をしましょう！半年後か一年後にはあなたの方のもとにスロヴァキア政府がやってきます！』という言葉だ。この言葉は、それを聞いた人々に恐怖を掻き立てただろう⁽¹¹⁰⁾と述べる。当初より中心都市の要求は実現可能性が低いと認識されていたことを示唆する記事である。マルティン代表団にとって、マルティンでの中心都市建設の実現自体が交渉の主目標だったのでなく、中心都市論は、同市の重要な地位を示すことによって、マルティンないし1875年にハンガリー政府によって閉鎖された文化団体であるマティツァ・スロヴェンスカーの再開に対する政府からの支援を求めるための交渉材料としてみなされていたことの傍証である。

現実には、1919年3月21日のハンガリーでの政変を契機に、4月後半にはハンガリーとの紛争が再発した。そのため中心都市に関する議論はスロヴァキア世論の問題関心の前景から後退し、ブラチスラヴァもスロヴァキア行政の中心地として歩み始める。

4. 1926～1928年の中心都市論

4-1. 中心都市論の背景—連立政権の組み替えと地方行政制度改革

第2節で述べたように、1920年代後半はルッペルトの中心都市論が集中的に発表された第二の時期である。ここでは、議論の背景である1925年11月の国会議員選挙を契機とした議会政治の動揺とそれに続く地方行政改革論の展開について説明したい。

第一次シュヴェフラ政権内部での農業党とチェコスロヴァキア社会民主党の対立の結果、任期満了前の1925年11月に上下両院の国会議員選挙が実施された⁽¹¹¹⁾。この選挙では社会民主党が全国的に大きく議席を減らし、チェコ系主要五政党が構成する連立与党⁽¹¹²⁾の総議席数は過半数を割り込んだ。スロヴァキアでは共産党とスロヴァキア人民党の二つの野党が議席を増やし、社会民主党以外にも農業党の議席も伸び悩みを見せた⁽¹¹³⁾。

110 “Budúce hlavné mesto Slovenska,” *NN*, 9. 4. 1919, p. 1.

111 Daniel E. Miller, *Forging Political Compromise: Antonín Švehla and the Czechoslovak Republican Party* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1999), pp. 134–135, 139–140.

112 1921年9月に成立したベネシュ政権と1922年10月成立の第一次シュヴェフラ政権では、国民民主党、チェコスロヴァキア人民党、農業党、国民社会党、社会民主党というチェコスロヴァキア系の主要五政党が連立与党を構成し、チェコ人を支持基盤とする全ての政党が支えるという意味から「全チェコ人政党連合」と呼称された。これは1918年10月末のチェコスロヴァキア建国時にチェコ諸州で権力の受け皿となった国民委員会の構成を継承するものであり、第一共和国の連立政権の基本形となった。中田瑞穂「チェコスロヴァキア第一共和制の形成（一九一八—一九二〇）：議会制民主主義の安定化過程」『国家学会雑誌』108巻3・4号、1995年、161–205頁；中田瑞穂「利益代表と議会制民主主義：世界恐慌下のチェコスロヴァキア連合政治」『スラヴ研究』47号、2000年、249–280頁。

113 Tabuľka XI3. Odevzdané platné hlasy při volbách do poslanecké sněmovny rep. Českoslov. v listopadu 1925 a případné mandáty. in Státní úřad statistický, *Statistická příručka Republiky československé III* (Praha, 1928), pp. 254–256.

選挙結果は、全国的には連立政権内での勢力関係の変化のみならず、従来の連立政権の構造に代わる新たな連立の枠組みの模索をもたらし、チェコ系主要政党が政策立案と実行を独占する1920年代前半に成立した議会政治の構造の動揺を導いた。また、スロヴァキアではこの選挙結果は農業党や社会民主党に属した与党系のスロヴァキア人政治家に危機感をもって受け止められ⁽¹¹⁴⁾、「スロヴァキア問題」の解決が急務だとの認識が諸政党で共有された。

この「スロヴァキア問題」とはチェコスロヴァキア共和国の東西両地域間の格差から生じた諸問題の総称である。経済面では、旧ハンガリー王国の経済圏から切断されチェコ工業との競争に曝されたスロヴァキア工業の苦境や、第一次世界大戦後にアメリカ合衆国への移民が停止し、さらにハンガリー平原部での季節農業が不可能になったことによる農村の貧困が主な問題となった。また、スロヴァキア地域で高い鉄道運賃も、農業と工業の両部門での競争を妨げる原因となる。そして、経済不振と失業率上昇の結果、社会不安も生じたのである⁽¹¹⁵⁾。他方で、スロヴァキア全体を代表する組織も欠如していた。スロヴァキア統治全権大臣の権限は1920年以降に縮小された。また1920年に採択され、1923年に施行された県制度法はスロヴァキアに六つの県（地図2参照）を設置すると同時に、スロヴァキア全域の経済案件を協議する場として県連合制度を規定した⁽¹¹⁶⁾。しかし、県連合は実際には活動せず、スロヴァキア全体の利益を協議する組織は存在しないままだった。

そのため、1925年以降に提示されたスロヴァキア問題の解決案では、組織の形成が論点となった。スロヴァキア人民党はスロヴァキア統治全権大臣の権限の再拡大と党員の任命を主張し⁽¹¹⁷⁾、与党である農業党のホジャは県連合制度を含む県制度の完全施行を⁽¹¹⁸⁾、社会民主党のイヴァン・デーレルはさらにスロヴァキア問題の討議と解消を主務とする特別国会委員会の設置を提案した⁽¹¹⁹⁾。さらに、国民民主党のカレル・クラマーシュは、県制度法の改正を通じた事実上のスロヴァキア州設置案を公表する⁽¹²⁰⁾。このように、1926年年頭からスロヴァキア行政に関する問題がスロヴァキア語メディアにおいて活発に取り上げられ始めた。

さらに、1926年3月の第二次シュヴェフラ政権の崩壊とチェルニー官僚内閣の成立を挟んだ後、1926年10月には連立政権の組換えが実現した。新政権では以前の連立政権と同様に農業党のシュヴェフラが首班に就いたが、連立与党の構成は大きく変化した。社会民主党と国民社会党のチェコ系の左派二政党が下野し、その代替としてドイツ系の中道右派政党が連立政権に参加した。民族的分断線を越えた国内の中道右派政党の提携という新たな枠組みが誕生したのである。連立政権は成立時点よりスロヴァキア人民党の参加を見込み、両者の

114 “Po druhých slovenských voľbách,” *Robotnícke noviny*, 21. 11. 1925, p. 1; “Omyly,” *Slovenský denník*, 8. 12. 1925, p. 1.

115 Mannová et al., *Krátke dejiny Slovenska*, (前注35参照) pp. 272–274.

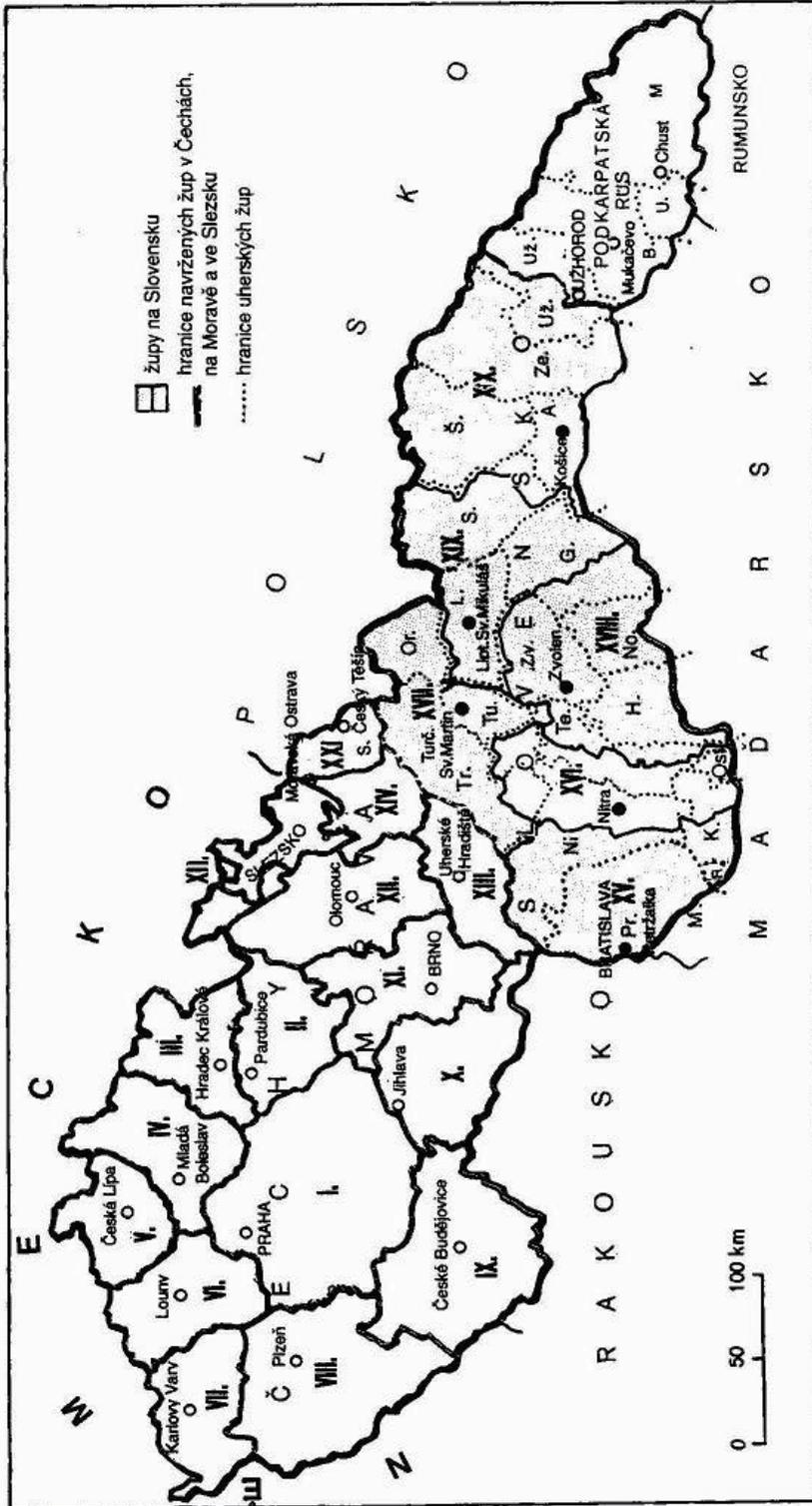
116 Zákon ze dne 29. února 1920 o zřízení župních a okresních úřadů republiky Československé. [Zákon č. 126/1920 Sb. z. a n.]

117 “Prívet k Národu Slovenskému,” *Slovák*, 1. 12. 1925, pp. 1–2.

118 “Min. dr. M. Hodža o politickej situácii na Slovensku,” *Slovenský denník*, 16. 12. 1925, pp. 1–2.

119 Ivan Déřer, “K otázke Slovenska,” *Robotnícke noviny*, 24. 12. 1925, pp. 1–2.

120 Karel Kramář, “Do Nového roku,” *Národní listy*, 1. 1. 1926, p. 1; Karel Kramář, “Otázka župného zřízení a zemská autonomie,” *Národní listy*, 3. 1. 1926, p. 1.



地図2：1920年の県制度法に基づく各県の境界線（地図内で実線によって示されているのが、各県の境界線であり、ローマ数字は県の番号である。スロヴァキア地域とポトカルパツカー・ルス地域において点線で示されているのは旧ハンガリー王国時代の県境である。） 出典：Karel Malý et al., *Dějiny Českého a Československého práva do roku 1945* (Praha: Linde, 1997), p. 498.

交渉が進められた。交渉では、スロヴァキアの地位を念頭に置きつつ、地方行政制度改革が重要な論点となり、県制度に代わる州制度の導入とスロヴァキア州の設置を骨子とした両者間の妥協が成立した。これを受け、スロヴァキア人民党は1927年1月に政権に加入する。続いて州制度法の審議が開始され、社会民主党とスロヴァキア国民党などの野党は州制度導入に反対したものの、同年7月には州制度法が成立した。州制度法においてブラチスラヴァはスロヴァキア全土を統括するスロヴァキア州の州庁所在地と規定され、新庁舎の建設など翌1928年7月に予定された州制度施行に向けた準備が開始された。

4-2. ルッペルトの諸論考と「集中論」

以上に述べた1926年以降の政治変動や、スロヴァキアの地位と行政制度改革に関する議論に対して、ルッペルトは中心都市論の再提示をもって呼応した。彼は中心都市に関する主要な論点を提示した1926年4月発表の『スロヴァキアの集中』に始まり、州制度導入準備が進展していた1928年2月に発表された『州行政と集中』へと至る諸論考を連続して公表し、論戦に参加する。このような背景を有するため、1920年代後半のルッペルトの中心都市論における具体的要求は、州制度の具体化を反映し次第に変化する。しかし、1927年7月の州制度法の成立と州制度導入準備の開始を受けて、最終的には、マルティンへの州庁移転とコメニウス大学法学部と哲学部の移転、ならびに人口と物流の増加に対応するための病院や新駅の建設などのインフラ整備へと収斂した⁽¹²¹⁾。

これらの諸論考において示されたルッペルトの立場は、基本的には第3節で扱った1919年の議論の時点と同様であり、彼はブラチスラヴァの地位強化と投資継続への反対と州制度実施を契機としたマルティンの新たな中心都市建設への支持を表明した。しかし、1919年の論考『スロヴァキアの中心都市』と比較した場合、この時期の論考の題名に「集中」という表現が繰り返し登場したことから伺えるように、「集中論」と呼べる新たな議論が展開されたことが注目に値する。

以下では、この時代の主要な諸論考から抽出された主要な論点を「財政論」、「中心論」、「集中論」と名付けつつ整理し、前節で分析した1919年の議論との比較を行い、この時代のルッペルトの議論の特徴を把握したい。

ルッペルトの第一の論点である「財政論」は、ブラチスラヴァでの州都建設に伴う多額の財政支出に対する批判である。財政負担の軽減に関しては、彼は『スロヴァキアの集中』においても「全ての新規の建物に関して、トゥリエツの方がブラチスラヴァよりもはるかに安価で建設できることは確実であり、財政の視点からもさほど負担とはならない。」⁽¹²²⁾と記し、当初より関心に含めた。しかし、彼はこの議論を1928年の『州行政と集中』においてより具体的に、地価が高いブラチスラヴァでの州庁舎の新設に向けた多額の予算計上に対する批判として展開し⁽¹²³⁾、対案として地価の安い中部スロヴァキアでの州都建設を通じて建設費の圧縮を実現する可能性を提示した⁽¹²⁴⁾。

121 Ruppeldt, *Srdce Národa*, pp. 9, 11; Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 20–23.

122 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 7.

123 Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 4–5.

124 *Ibid.*, p. 21.

しかし、この批判は純粋な経済的視点のみに基づくものではない。先に紹介した州庁舎建設への予算計上に対する批判に続く箇所、ルッペルトはブラチスラヴァの土地と住宅の所有者は「旧住民」、つまりハンガリー系、ドイツ系、ユダヤ系であると指摘しつつ、ブラチスラヴァへの投資が「旧住民」を利するとの見地から批判を加える⁽¹²⁵⁾。この問題に関しては「集中論」の部分で詳しく触れたい。

「中心論」は、この時期には『スロヴァキアの集中』と続く『民族的集中』の二つの論考において扱われた。『スロヴァキアの集中』の冒頭で、改めてルッペルトはスロヴァキアの行政的・文化的中心の必要性を提示した。具体的な立地に関しては「これまでのスロヴァキアの民族的・文化的中心だったマルティンは……スロヴァキア人とスロヴァキアにとってより良い中心地となりうるだろうか？〔マルティンは〕スロヴァキアの領域的、交通的、民族誌的、言語的、伝統的中心であり、もっとも良く防御されている土地であるため、最良の場所と思える」⁽¹²⁶⁾と彼は述べ、1919年と同様にトゥリエツとマルティンがスロヴァキアの二重の中心である理由に基づき、中心都市に相応しいとの結論を導いた。また、この関連において、彼は『スロヴァキアの集中』においてシロバールが下した統治大臣のブラチスラヴァ移動の決定に対しても評価を下した。ルッペルトは1918年12月時点で住宅不足という根拠に基づき決定を下したシロバールを理解するが、同時に「このような〔住宅不足の〕事実のみが、スロヴァキアの民族的中心が常識に反した最周縁に恒久的に置かれることを決定し、必要とされているスロヴァキアの領土と民族の集中に対しては嘲りが加えられても良いのだろうか？」⁽¹²⁷⁾と、疑問を提示した。彼は住宅不足という瑣末な問題が中心地を決定する事態を不合理と判断し、1920年後半に展開にされたスロヴァキアの地位に関する議論に是正の好機を見出した。

他方、1920年代の後半の諸論考では中心論の展開も確認できる。1919年の『スロヴァキアの中心都市』において、ルッペルトは中心都市を政治と経済の双方の中心として位置付けたが⁽¹²⁸⁾、『スロヴァキアの集中』では経済的中心と政治的・文化的行政との分離可能性を指摘し、彼は今後もブラチスラヴァが経済的中心の役割を果たすことを容認した⁽¹²⁹⁾。これは1920年代のブラチスラヴァの発展を受けた変化だが、後述する集中論と合わせて考察した場合、中心都市論の焦点が中心から放射される文化伝播の力へと移動したと評価できる。また、文化伝播の影響力との関連では、彼がコシツェを核とする東スロヴァキア独自の民族意識形成と分離に対する懸念を1920年代後半にも繰り返し示したことを指摘したい⁽¹³⁰⁾。再度、彼は最西端のブラチスラヴァを不適切とみなし、中部のマルティンが政治・文化の中心となり、東部を含む全土に文化的影響力を及ぼす放射源となる意義を論じたのである。

中心論の射程は『民族的集中』においてさらに広がる。この論考において、ルッペルトは

125 Ibid., pp. 5–7.

126 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 4.

127 Ibid., p. 6.

128 Ruppeldt, *Hlavné mesto Slovenska*, p. 8.

129 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 4.

130 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, pp. 12–13; Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 10, 30.

欧州諸国の歴史を参照しつつ、首都の位置が持つ意味や首都の位置が内政や外交へと及ぼす影響に関して普遍的な原則を導きだそうと試みた⁽¹³¹⁾。彼によれば、首都の後背地確保という動機こそが列強の外交力学の主要な駆動力であり、辺境に所在する首都は不健全に拡張主義的な外交政策を招きうる見地からも批判されるべきだった⁽¹³²⁾。また、この他にも、知識人と一般民衆との健全な接触の阻害や近隣諸国からの文化的影響力という悪影響が及ぼされた事例などを指摘し、辺境の首都が与える否定的影響に言及した⁽¹³³⁾。これらの辺境の首都の欠点を示しつつ、ルッペルトは国土の中心に首都が置かれる利点を強調し、中心都市論を補強する。1920年代後半のルッペルトは、共時的視点と通時的視点の双方を備えつつ中心論を展開したのである。

最後の「集中論」は、国民経済的側面と民族心理的側面に区分でき、先に提示した財政負担の見地からのブラチスラヴァに対する批判とも連関しながら展開された。

国民経済的側面の起点は、確認となるが、非スロヴァキア系の「旧住民」が経済的な実権を握る都市ブラチスラヴァに対する投資が継続される現状への批判である。ルッペルトは、ここにスロヴァキア人からの納税に由来する国家投資がブラチスラヴァ市民の多数派を構成する「旧住民」の利益となり、再投資を経て非スロヴァキア系の中産層の経済力が強化される構造を見出す。彼は「『我らの』国家、『我らの』自由が彼ら〔＝旧住民〕にもたらす発展により、まったく自然かつ継続的に、〔旧住民は〕富裕化し続ける。……そしてスロヴァキア民族は、国民経済的にはかつて彼らがいた場所に留まり、〔州制度導入に伴い〕我らの県都とそこに住む住民は死滅していく」と述べ、この構造を痛烈に批判した⁽¹³⁴⁾。

マルティン整備に伴う中部スロヴァキアへの投資はこの構造の是正策として対置された。スロヴァキア系住民の比率が高い中部における産業育成と失業率改善、さらには新都におけるスロヴァキア系中産層の育成を通じた「スロヴァキア問題」の解決という効果が期待できる政策、なおかつ政府と民衆との距離を狭める方策として、ルッペルトは新都建設の意義を強調したのである⁽¹³⁵⁾。

集中論の民族心理的側面は、第一に1919年にブラチスラヴァに設立されたコメニウス大学のマルティンへの移転要求と関連して議論される。ルッペルトはコスモポリタンの雰囲気強く、多言語使用の状況が続く都市であるブラチスラヴァで大学教育を受ける青年層に及ぶ外国文化の悪影響を懸念した⁽¹³⁶⁾。是正策として、彼は民族的雰囲気が強いと認識するマルティンへのコメニウス大学哲学部と法学部の移転を要求し、教育を通じた民族理念の強化を要求した⁽¹³⁷⁾。第二に、ルッペルトは政治と文化の両面において「民族の心臓」という役割を担うべき中心都市の建設事業自体が民族心理に対して及ぼす肯定的な影響を期待した。彼は、全民族的な目標設定と達成に向けた協働を通じてチェコスロヴァキア共和国建国後の

131 Ruppeltdt, “Národná koncentrácia,” (前注 67 参照) p. 443.

132 Ibid., pp. 454–456.

133 Ibid., p. 467.

134 Ruppeltdt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 5–7. 引用部は p. 7.

135 Ruppeltdt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 8–9; Ruppeltdt, *Koncentrácia Slovenska*, pp. 7–8.

136 Ruppeltdt, *Srdce Národa*, p. 5.

137 Ibid., pp. 9–10.

スロヴァキア人知識人の間で顕著となった党派分断を克服し、全民族的な連帯を再構築する効果を見込んだのみならず⁽¹³⁸⁾、建設事業への献身を通じて中心都市建設に参加した一般民衆の民族意識が高揚する効果をも予期したのである⁽¹³⁹⁾。

ルッペルトによれば、同時代的にも首都建設を通じた全民族的な勢力集中の好例が存在した。戦間期のトルコ共和国で進められていたアンカラへの首都移転事業である。また、オスマン帝国の旧首都であるイスタンブルは領土変更に伴い国土の辺境に位置することになったコスモポリタンの都市の典型としても理解され、彼の議論ではブラチスラヴァを示唆する例として用いられた⁽¹⁴⁰⁾。オスマン帝国とトルコ共和国の事例は、ルッペルトの中心都市論において、辺境に位置する首都の欠点と国土の中央への首都移転の効用との双方を示す例として提示され、スロヴァキアが倣うべき模範として繰り返し言及される⁽¹⁴¹⁾。

まとめると、1920年代後半のルッペルトが中心都市論において論じた「集中」の本質とは、スロヴァキア人のみの共同体の強化に向けた経済力向上と中産層の育成、そしてスロヴァキア人知識人や大衆の勢力結集への希求だった。彼はマルティンの中心都市化案をそれらの目的達成に向けた手段として位置付け、意義を強調したのである。

4-3. ルッペルトの議論の広まりと限界

以上に紹介したルッペルトの議論はスロヴァキア語新聞の各紙でも紹介され、知識人の間で一定の反響を引き起こした。当時のチェコスロヴァキアでは新聞は各政党や政治家との関係を維持していた。そのため、各紙の紙面には彼らの意向を反映する記事が掲載される傾向が存在する。その視点に基づき、ルッペルトや彼に反応した記事を考察したい。第2節で述べたように、ルッペルトは農業党に所属しつつも、中心都市論を『国民新聞』や『スロヴァキア展望』誌などスロヴァキア国民党に近いメディアで発表した。これに関してはルッペルト自身が興味深い経緯を書き残している。それによると、1926年3月に執筆した論考「スロヴァキアの集中」を、彼は当初進歩派のスロヴァキア語総合誌である『潮流』誌に持ち込んだものの、問題設定が現実的ではないとの理由から掲載を拒否された。このような無関心こそが最大の問題だと憤るルッペルトは同論考を『スロヴァキア展望』誌に持ち込み、掲載されたという⁽¹⁴²⁾。このエピソードからはスロヴァキア国民党系のメディアが積極的にルッペルトの議論を受容し、支持を与えた姿を伺える。特に『国民新聞』は紙面を挙げてルッペルトの中心都市論への支持姿勢を示した⁽¹⁴³⁾。

また自治派の政党であるが1927年1月より連立政権に参加していたスロヴァキア人民党

138 Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 18–19.

139 Ruppeldt, *Srdce Národa*, pp. 13–14.

140 Ruppeldt, “Národná koncentrácia,” p. 477.

141 Ruppeldt, “Národná koncentrácia,” pp. 474–477; Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 12–20.

142 Ruppeldt, “Koncentrácia Slovenska,” (前注 65 参照) p. 224.

143 それらの一例として、ルッペルトの論考「州行政と集中」に続けて『国民新聞』に掲載された“Reflexia na Ruppeldtove články,” *NN*, 9. 3. 1928, pp. 1–2; “‘Koncentrácia’ krajinskej správy na Slovensku,” *NN*, 11. 3. 1928, p. 2 などの記事を指摘できる。

系の主要紙である『スロヴァキア人』紙上でもスロヴァキアの文化的中心に関する議論が展開された。例えば、スロヴァキア民族文化団体であるマティツァ・スロヴェンスカーの事務長と『スロヴァキア展望』誌の編集長を当時勤めていたシュテファン・クルチュメーリも『スロヴァキア人』紙に投稿し、ブラチスラヴァでスロヴァキア人が感じる疎外を根拠にしつつ、ルッペルトと同様にマルティンへの中心都市移転を訴えた⁽¹⁴⁴⁾。また、マルティンではなくスロヴァキア北西部のジリナ⁽¹⁴⁵⁾や中部のバンスカー・ビストリツァ⁽¹⁴⁶⁾をスロヴァキアの中心として位置づける議論も同紙に掲載された。

一方で農業党のスロヴァキア組織に近い『スロヴァキア政治』紙においても1927年2月にルッペルトとクルチュメーリを受けて中心都市に関する議論が紹介された⁽¹⁴⁷⁾。そこでは経済面と交通面からはブラチスラヴァこそがスロヴァキアの中枢に相応しいと認めつつも、ブラチスラヴァでスロヴァキア系住民が少数派となる住民構成を変えられないことからマルティンを中枢に推す議論に対しても一定の理解を示し、今後の議論を期待している⁽¹⁴⁸⁾。

このようにルッペルトの諸論考は、スロヴァキア語メディアに対してスロヴァキア自治の是非とは異なる中心都市の位置という論点を提供し、議論の契機を与えたのである。

しかし、彼の問題提起に対する明確な反対論も提示される。例えば、農業党のスロヴァキア人指導者であるミラン・ホジャは1926年4月の『スロヴァキア政治』紙上で「スロヴァキアは固有の中心地を有しており、我々はスロヴァキアの組織を弄ぶことや中心を変えることはできない。スロヴァキアは歴史の重みや莫大な伝統に依拠する中心を有しており、その中心は相当程度スロヴァキアのかつスラヴ的である。チェコスロヴァキアが持つドナウの拠点であるブラチスラヴァは、国家にとってスロヴァキアが有する不可欠な中心のうちの一つとなった。それゆえに、ブラチスラヴァが我々の中心となり、スロヴァキアの中心となることが重要である」⁽¹⁴⁹⁾と記した。同様に、『スロヴァキア人』紙は「ブラチスラヴァはドナウを有する。同市はスロヴァキア州の州都に相応しい商業的首都であり、それはマルティンが過去に有したことがなく有しえない地位である。ドナウは移動できずドナウなしにマルティンから中心都市を築くこともできない。……ブラチスラヴァは鉄道を中心であり、それもマルティンが持ちえない利点である。……我々が全く新たなスロヴァキアの中心都市の建設を通じて創造能力を発揮しうるならば、その創造能力はブラチスラヴァを民族化する方向にも発揮しうる」⁽¹⁵⁰⁾と一面記事に記し、それぞれブラチスラヴァがスロヴァキアの中心となることを是認しつつ、ルッペルトの議論に反対の意思を示した。

これらの『スロヴァキア人』紙や『スロヴァキア政治』紙の例などに見られるように、同

144 Štefan Krčméry, “Slováci – natio urbes condens,” *Slovák*, 13. 2. 1927, p. 3.

145 “Žilina – hospodárske stredisko stredného Slovenska,” *Slovák*, 24. 2. 1927, p. 3; 25. 2. 1927, p. 3.

146 “Banská Bystrica hl. mesto Slovenska? K debate o naše hlavné mesto,” *Slovák*, 22. 4. 1927, p. 4.

147 “O župy a o hlavné mesto Slovenska,” *Slovenská politika*, 17. 2. 1927, p. 1; “O hlavné mesto Slovenska,” *Slovenská politika*, 22. 2. 1927, p. 1.

148 “O hlavné mesto Slovenska,” *Slovenská politika*, 22. 2. 1927, p. 1.

149 Milan Hodža, “Turč. Sv. Martin a Bratislava,” in Milan Hodža, *Články, reči, štúdie sväzok VII* (Bratislava: Linografia, 1934), p. 106. (初出は *Slovenská politika*, 27. 4. 1926.)

150 “O hlavné mesto Slovenska,” *Slovák*, 16. 2. 1927, p. 1.

一の新聞の紙面に中心都市論に関係する異なる論調の記事が掲載されるなど、ルッペルトの問題提起によって各紙の論調に一時的に乱れも起きた。しかし、ルッペルトの議論はスロヴァキア国民党以外の各政党やホジャなどの主要政治家からの支持獲得と政治的決定に対する影響力行使に失敗した。その結果、1928年7月施行の州制度の下でもブラチスラヴァが州庁所在地となった。以後、スロヴァキアの行政制度は1938年10月のスロヴァキア自治成立まで変動せず、ルッペルトも中心都市に関する論考を控えた。そしてスロヴァキアの中心都市に関する論議も再度沈静化したのである。

以上の第3節と第4節では、スロヴァキアとその地位が問われた情勢と関連付けながら、ルッペルトの中心都市論の展開と特徴を分析した。第5節では、その理解に基づきつつ、中心都市の背後に存在するルッペルトのスロヴァキア地域認識とスロヴァキア民族と文化に対する認識を考察したい。

5. ルッペルトの「スロヴァキア」と「スロヴァキア民族」像

5-1. マルティン認識と中心都市像

ルッペルトの諸論考に共通する前提として、まず彼がトゥリエツとマルティンの地位を非常に強調したことに注目したい。この点が彼のスロヴァキア文化に対する認識を理解する手掛かりであり、彼とスロヴァキア国民党寄りの人々を接近させるとともに、その他の論者との相違を生んだ原因だと考えるからである。

例えば『スロヴァキアの中心都市』において、ルッペルトは「スロヴァキアの中心はトゥリエツである。スロヴァキア文章語の発展の歴史や覚書やマティツァ・スロヴェンスカー、ギムナジウム、既に50年以上の歴史を持ちマルティンと分かちがたく結びついた『国民新聞』に集い、……そして政治的闘争や裁判、我々の民族的再生を示した1918年10月30日の宣言に至るまでの様々な集会や協議において示された最良のスロヴァキアの男たちの全ての文化的・政治的活動がその地位を形作った」⁽¹⁵¹⁾と述べ、『スロヴァキアの集中』においても同様の評価を述べた⁽¹⁵²⁾。彼にとって、マルティンは19世紀後半に民族文化と民族運動の結集によって形成されたスロヴァキア文化の唯一の中心地であり、ハンガリー政府の圧力によって正常な発展を妨害されたものの、文化的中心の形成を希求するスロヴァキア人の民族活動の具体的な表現だった。それゆえに彼の議論では、マルティンがスロヴァキアの将来的な中心の役割を担うことも正当化された。

だが、彼の論考においてはマルティンの地位が強調された一方で、19世紀後半以前にあるいは同時代に他の都市とその知識人が担った役割に対して払われる評価は低い。ところで、世紀転換期前後からは、ブラチスラヴァを拠点とした社会民主主義者や、ブダペストを拠点とした『潮流』誌に集い自由主義的な社会改革を唱えた派閥⁽¹⁵³⁾、プラハにおいてチェコスロヴァキア主義に傾倒した学生らの活動、ルジヨンベロクを拠点としたアンドレイ・フリン

151 Ruppeldt, *Hlavné mesto Slovenska*, pp. 22–23.

152 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 5.

153 Pekník, “Cesty čechoslovakizmu,” (前注5参照) pp. 524–525.

カヤシロバールらなど、スロヴァキア人政治家の政治路線と主張は多様化の傾向を示していた。彼らの活動はスロヴァキア政治の再活性化を導き、戦間期の諸党派の源流を形成する⁽¹⁵⁴⁾。ところが、ルッペルトはマルティンへの集中を妨害したとして彼らの動きに対して概して否定的な評価を下している⁽¹⁵⁵⁾。

このように、彼の中心都市論における片方の支柱である「中心論」の前提であり、スロヴァキア民族文化の中心として描写されるマルティンの高い評価は、19世紀後半から20世紀にかけての民族運動の実相から導き出されたものではなかった。むしろ、「スロヴァキアのメッカ」⁽¹⁵⁶⁾という表現に現れるような、マルティンのみがスロヴァキア民族運動において中心的な役割を果たしたという理解とマルティン像を基礎にしていた。そして、例えば4-3.で触れたクルチュメーリの論考もマルティンの諸組織の伝統という認識を基に組み立てられるなど、このマルティン像は、スロヴァキア国民党寄りの人々が共有し流布した、19世紀後半のスロヴァキア史に関する理解を通じて形成されたのである。

さらに「集中論」にもマルティンとスロヴァキア民族運動に対するルッペルトの認識が姿を現す。彼が論じた「集中」の理想の姿とは、第4節で指摘したように、経済振興を通じたスロヴァキア人中産層育成に加えて、全民族が関与する大事業への協働を通じた知識人との連帯回復と民族構成員全員の間での民族意識の活性化だった。ここにもチェコスロヴァキア建国という形で19世紀以来の民族的目標が達成された後、戦間期に開始されたスロヴァキア系諸政党の分立をスロヴァキア知識人との民族的連帯の拡散と喪失として解釈し、かつて試みられたマルティンへの「集中」の回復を理想とみなしたルッペルトの反応が表れたのである。

彼が「民族の心臓」と描写した理想の中心都市は、19世紀半ば以降のスロヴァキア民族運動を通じて形成されたマルティン像を継承する都市であり、中心論と集中論の両方の視点からも両者は重ね合わされる存在だった。ルッペルトが論じた中心都市論の背景には、マルティンを核とした民族的勢力の結集という、スロヴァキア民族とその文化の発展史に対する彼の認識と将来像が存在していたのである。

5-2. 外国文化への警戒心とスロヴァキア文化観

ルッペルトのスロヴァキア文化に関する認識を理解する手掛かりとなる第二の特徴は、ウィーンが放射するドイツ文化に代表される外国文化とスロヴァキアの都市が持つ多文化性に対する強い警戒心である。彼はブラチスラヴァを「旧住民」が経済的実権を掌握する街として描写しただけでなく、コスモポリタンの都市や⁽¹⁵⁷⁾、あるいは「ペスト＝ウィーン的で表層的なカフェ生活」が存在する都市とも描写し、スロヴァキア人知識人が都市生活の誘惑を通じて墮落する危険性に対して懸念を払った⁽¹⁵⁸⁾。ブラチスラヴァの危険に対してルッペルトは、自然と民族の伝統に囲まれた中部スロヴァキアを知識人の理想的な育成環境とし

154 Mannová et al., *Krátké dejiny Slovenska*, pp. 235–238.

155 Ruppeldt, *Koncentračné snahy slovenské do roku 1918*, (前注 74 参照) pp. 151, 161, 177–178.

156 この表現が使用されている例は“Budúce hlavné mesto Slovenska,” *NV*, 9. 4. 1919, p. 1 など。

157 Ruppeldt, *Srdce Národa*, p. 5.

158 Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, p. 29.

て提示した⁽¹⁵⁹⁾。外国文化や多文化性に対する彼の警戒心の裏側には、スロヴァキア民族は小民族であり、それゆえにスロヴァキア文化も脆弱であるとの認識があった⁽¹⁶⁰⁾。そして、文化の脆弱性を克服し、外国文化の脅威に対処する手段として、スロヴァキアの地理的・民族的な「二重の中心」に位置する中心都市への知識人の集約を通じた文化発信力の強化を求めたのである。

ルッペルトがブラチスラヴァに対して抱いた警戒心は、単にブラチスラヴァがスロヴァキアの領域とスロヴァキア人の居住領域の辺境に存在したことに由来したのではない。彼はブラチスラヴァを外国文化が知識人を介してスロヴァキアへと侵入する窓口として警戒し、それゆえに教育・文化の中心地として不適切だと判断したのである。

ここで興味深いことは、ハンガリー王国時代にもプレスブルク／ブラチスラヴァの多文化性は警戒の対象となった事実である。バベヨヴァーはこの警戒心こそがトルディ・サークルなどに代表されるハンガリー系諸協会がブラチスラヴァのハンガリー化を推し進めた駆動要因だったと指摘した。そして、大学誘致活動や市内外におけるモニュメント建立の背後には、ウィーンを臨む王国の最西端にあり多民族的なブラチスラヴァをハンガリー文化の一拠点ないし「ハンガリー国民の砦」⁽¹⁶¹⁾と改造する意図が存在したのだと議論した⁽¹⁶²⁾。

このようにブラチスラヴァが持つ多民族性ないし多言語性、あるいは「プレスブルク人」アイデンティティを、自らが所属する民族文化に対する脅威として把握した点では、ハンガリー王国時代のハンガリー系住民とルッペルトの認識は共通する。だが、ルッペルトは、かつてのハンガリー・ナショナリストや、戦間期のスロヴァキア人の主流政治家の認識とは異なり、スロヴァキア文化の脆弱性と文化的影響力の限界を認識していた。それゆえにルッペルトは中部スロヴァキアにおける拠点建設という防衛的な案を採用した。彼の構想における「民族の心臓」は、東スロヴァキアを含む「スロヴァキア全土」への文化的影響力を放射すべき源ではあったが、19世紀後半と同様に、国境ないしスロヴァキア人の居住域を越えた影響力までは想定されない防衛のための中心だったのである。

このようなスロヴァキア文化の影響力の限界に関するルッペルトの認識は、スロヴァキアの領域に関する彼の認識にも反映する。彼の「スロヴァキア」は、スロヴァキア人居住地と非スロヴァキア人居住地から構成される領域だった。両者の間に引かれる境界線は非スロヴァキア人からの侵犯から防衛されるべき線としてみなされる。そして彼は、多文化的な「非スロヴァキア人の都市」と認識したブラチスラヴァをスロヴァキア文化へと同化する可能性に対して強い懐疑を抱いた。同化しえないブラチスラヴァは、スロヴァキア人の領域に組み込みえない都市であり、スロヴァキアの中心都市に成りえなかったのである。

159 Ruppeldt, *Srdce Národa*, p. 10; Ruppeldt, *Krajinská správa a koncentrácia*, pp. 8–9.

160 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 3.

161 Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, p. 153.

162 19世紀末のハンガリー王国とハプスブルク君主国の存在という状況下で、ハンガリー人民族主義者とスロヴァキア人民族主義者のそれぞれがプレスブルクをどのようにそれぞれの領域構想に位置付け、どのようにその変更を試みたかに関しては、Babejová, *Fin-de-Siècle Pressburg*, pp. 153–190に詳しい。

このようなルッペルトのスロヴァキア文化と領域に関する認識は、例えば 4-3. で引用したクルチュメーリの議論とは共通性を持つものの、ホジャの論考や『スロヴァキア人』紙の文面に見られる主流派の認識と大きく相違した。主流派は、スロヴァキア全体をスロヴァキア人の居住地とみなし、非スロヴァキア人地域の同化の可能性に言及する。主流派にとってもブラチスラヴァは多文化的性格を維持すべき都市ではなかったが、同市はスロヴァキア化可能であり、スロヴァキア化されるべき都市だったのである。

以上、中心都市に関するルッペルトと他の論者との認識の相違の背後には、スロヴァキア人の持つ力とスロヴァキアの領域に関する認識の相違が存在していたと結論付けられる。

5-3. 中心都市論の復古的性格

これまでの分析を踏まえるならば、ルッペルトが政治的には農業党に属しつつもスロヴァキア国民党寄りのメディアを使用した理由についても説明を行える。両者の提携の原因は、5-1. で触れたマルティン重視の構想と並んで、スロヴァキア民族運動ないしスロヴァキア政治の将来像に関する両者の認識の共通性に求められる。前述のようにルッペルトは、中心都市建設を通じた知識人全体の連帯の回復とスロヴァキア人全体の民族意識の高揚を唱えた。彼は、階層ごとの利害関係や政治思想に基づく政党分化と各党支持者の現世的・現実的な利害追求の考慮よりも、全てのスロヴァキア人による中心都市建設という一つの目標達成を優先させた。これは、彼にとって中心都市の建設が、スロヴァキア人の文化的・政治的自立に向けて勢力を集中させていたという彼の描く 19 世紀的なスロヴァキア民族運動の姿を戦間期に復活させるための計画だったためである。他方、スロヴァキア国民党は、1871 年の結党以来、世紀転換期前後の諸派の登場の後もスロヴァキア民族運動では権威と指導的な立場を維持していた。しかし、チェコスロヴァキア建国後の諸派の離脱の結果、小政党に転落した⁽¹⁶³⁾。その後の同党は、1919 年に活動を再開したマティツァやマルティンの諸組織・諸協会が持つ権威に縋りつつ、スロヴァキア自治派かつルター派の政党として自らを定義したが⁽¹⁶⁴⁾、単独で国政選挙に参加することも困難な地位にまで追い込まれた。知識人と民族の勢力全体のマルティンへの結集を求めるルッペルトの議論は、スロヴァキア国民党にとって、かつて自党が発揮していた指導的立場の回復を見込める、受容しやすい議論だった。中心都市論に関するルッペルトとスロヴァキア国民党系のメディアとの密接な関係と彼らからの支持は、以上の共通項の存在から説明できる。

このようにルッペルトの中心都市論とそれに基づく議論は、自治派對中央集権派という単純な対立の図式のみからでは、戦間期のスロヴァキア政治とスロヴァキアの地位に関する構想を完全に理解できないことを改めて示している。中心都市論に即して構図を描くならば、対立の断面は、スロヴァキア国民党とその他の政党との間にあり、その背後にはチェコスロヴァキア建国以前の民族運動に存在したとみなされた民族全体の連帯の回復か、あるいは各

163 Lipták et al., *Politické strany na Slovensku* (前注 41 参照), p. 105; Marek Hruška, “Slovenská národná strana,” in Pavel Marek et al., *Přehled politického stranictví na území českých zemí a Československa v letech 1861–1998* (Olomouc: Katedra politologie a evropských studií Filozofické fakulty Univerzity Palackého v Olomouci, 2000), pp. 228–229.

164 “Čo chce slovenská národná strana,” *NV*, 18. 5. 1922, pp. 1–2; 21. 5. 1922, pp. 1–2.

党の支持層である各階層の個別利害の追求のどちらを優先するかという意識の違いが存在していたと結論付けられる。

おわりに

本稿では、ルッペルトが戦間期、とりわけ 1920 年代後半までに提示した中心都市論を扱った諸論考を分析し、その背景に存在する彼のスロヴァキアの領域と民族文化に関する認識、及び他の論者との相違に関して考察した。その結果、彼の中心都市論は、周囲の外国文化との比較においてスロヴァキア人が有する文化的勢力の脆弱性の認識に依拠した議論であり、彼は、民族と文化の防衛を目的として文化的影響力を放射する拠点という性格をマルティンに付与したとの結論を導いた。新たな中心都市建設という野心的な計画を提唱した彼の議論は、逆説的ながら、第一次世界大戦後の中欧において、ハンガリー王国からの離脱とチェコスロヴァキアへの参加を実現した直後にスロヴァキア人が有していた実力を冷静に評価する前提から出発していたのである。

ルッペルトは、1938 年 9 月末のミュンヘン協定の締結後に記された論考において再び、このような文化防衛の必要性に関する認識を議論する。ここで彼はドイツへの警戒心を改めて示したが、同時にハンガリーとの領土紛争がスロヴァキアとハンガリーの両者が納得しうる形で解決されることへの期待も滲ませた⁽¹⁶⁵⁾。しかし、11 月初めのウィーン裁定の成立後に記された論考において、ルッペルトはコシツェやノヴェー・ザームキなどの諸都市を含む南部スロヴァキアの割譲の結果、戦間期のチェコスロヴァキア政府が辺境に投下した投資が無に帰したことを批判しつつ、中心への投資を求めた彼の持論の正しさを改めて主張した。そして、再度マルティンへの州都移転と整備を要求する⁽¹⁶⁶⁾。

さらに、第二次世界大戦後の 1945 年 8 月に公刊した論考『今のみの好機』において、ルッペルトは再度マルティンへの中心都市移転を要求した。その際、興味深いことに、彼は直近の戦争経験を基に、山地に囲まれた盆地であるトゥリエツ地方が防衛上の利点を有することを主要な論拠として提示する⁽¹⁶⁷⁾。本論では扱えなかったが、比喩のみに留まらない軍事的な国土防衛や戦略的見地からの議論は、ルッペルトが戦間期の中心都市論でも触れた論点だった⁽¹⁶⁸⁾。ここからは、彼が第一次世界大戦とそれに続くハンガリーとの紛争を経験した知識人として、戦間期以降の中欧を諸民族や諸国家が相争う空間と、そして紛争再発の可能性が高い空間と認識したことが改めて明白となる。軍事的視点は、スロヴァキアを含めた中欧の地域再編構想を扱う際に無視できない一論点だろう。

最後に、ルッペルトの中心都市論と関連するが、本稿では扱えなかったいくつかの問題に触れたい。第一の問題は、ルッペルトの中心都市論に対して他の知識人や政治家から提示さ

165 Fedor Ruppeldt, "Nové hranice," *Slovenský denník*, 12. 10. 1938, p. 1.

166 Fedor Ruppeldt, "Kuru pre líšku," *Slovenský denník*, 6. 11. 1938, p. 1.

167 Ruppeldt, *Teraz alebo nikdy*, pp. 7, 9.

168 Ruppeldt, *Koncentrácia Slovenska*, p. 9; Ruppeldt, "Národná koncentrácia," p. 469; Ruppeldt, *Srdce Národa*, p. 7.

れた反応や反論に対する評価である。4-3. で簡潔に紹介したが、ルッペルトの中心都市論とは異なる視点からの議論も存在する。それらを手掛かりにするならば、1926年から1928年にかけてスロヴァキア人政治家の間で交わされたスロヴァキアの地位を巡る議論に関してより包括的な描写を提示しうる。また将来的には、スロヴァキア人政治家のみならず、ハンガリー人政治家などスロヴァキアに利害を持つ少数民族の立場からの議論も議論に組み込まなければならない。

第二の問題は、スロヴァキアの諸都市ないし諸地方の立場である。本稿では基本的にルッペルトの議論に即し、ブラチスラヴァ対マルティンの構図から記述した。しかし、4-3. で触れたようにジリナやバンスカー・ビストリツァを中心都市として支持する議論も存在した。また、スロヴァキア域内で第二の大都市であるコシツェを核とした東スロヴァキアの立場も無視できない。本稿は、東スロヴァキアを含む各地方をマルティンないしブラチスラヴァから文化的影響力を放射される客体としてのみ扱った。しかし、各地方は当然ながら独自の利害関係を有しており、今後は各地方の立場と主張も考慮する必要がある。

このように、戦間期のスロヴァキアの領域に関する議論を総合的に理解するためには、本稿で扱ったルッペルトの議論以外にも、以上に指摘した他政党や少数民族、各地方などから提示された複数の議論を手掛かりとして利用しつつ把握する必要がある。これらに関しては今後の研究課題としたい。

Fedor Ruppeldt's Arguments about the "Capital City" of Slovakia during the Inter-war Period

KOSAKA Naoki

This article focuses on Fedor Ruppeldt's arguments concerning the "capital city" of Slovakia, which he wrote and published in several articles during the inter-war period. Through analyses of them, the author describes Ruppeldt's notion of Slovak national culture and the territory of Slovakia, and compares it with the opinions of other Slovak intellectuals.

Before 1918, in the Kingdom of Hungary, Slovakia did not form an administrative unit, and it also lacked its own political-administrative center. This situation changed after the foundation of the Czechoslovak Republic and the incorporation of Slovakia into the new nation-state of Czechs and Slovaks. In February 1919, Bratislava, the westernmost and biggest city of Slovakia, was selected to be the seat of the minister for administration of Slovakia, and became the seat of the newly formed Slovak Provincial Office in 1928. Many Slovak leaders also considered Bratislava to be the political-administrative and national-cultural center, the "capital city" of Slovakia, although the majority of inhabitants in Bratislava had been Magyars and Germans throughout the inter-war period, and their cultural and economic influences in the city were still manifest.

Fedor Ruppeldt, a Slovak evangelic intellectual and collaborator with R. W. Seton-Watson, was an ardent opponent of the consolidation of Bratislava as the "capital city" of Slovakia. In his articles, he argued for the town of Martin, the center of the Turiec region in central Slovakia and the recognized center of the Slovak national movement during the second half of the nineteenth century. Ruppeldt claimed that Martin was suitable as the "capital city" of Slovakia using two arguments: analysis of the "center of Slovakia" and the argument about the "concentration of Slovakia."

Ruppeldt sought the "center of Slovakia" from two standpoints: the national-cultural and the geographical-transportational. According to him, Turiec and Martin composed the true center of Slovakia from both standpoints, being located in the center of the territory inhabited by the Slovak people and having an important railway network junction in Slovakia. In contrast, he considered Bratislava unsuitable as Slovakia's center, as it stood on the national and geographical periphery of Slovakia.

Ruppeldt argued about the "concentration of Slovakia" as questions of both national economy and national consciousness. As for the question of national economy, Ruppeldt fiercely criticized continuous investments in Bratislava by the Czechoslovak government. According to him, the land price in Bratislava was very high and landowners were mainly the "old inhabitants," namely not Slovaks, but Magyars, Germans, and Jews, who were the traditional elites of the city. Therefore, further construction of Bratislava was not only economically irrational but also a mere waste of the national property of Slovaks, because investments in it only resulted in benefit to these "old inhabitants," not to Slovaks. On the other hand, the inhabitants of Turiec and Martin were almost totally Slovaks, but they suffered from poverty and economical devastation after WWI. He considered investment in Martin and a project to reconstruct it to be a remedy for their sufferings, the impetus for re-

covery of industry in central Slovakia, and thereby the driving force behind the emergence of a new Slovak middle class.

In questions of national consciousness, Ruppeltdt criticized the cosmopolitan atmosphere in Bratislava as the source of the degeneration of young Slovak intellectuals. He demanded the relocation of Comenius University from Bratislava to Martin. More generally, he argued for the psychological effects of the construction project itself. According to him, such a large national project would require cooperation among all Slovak intellectuals beyond party confrontation, and as a result, it would reverse the political fragmentation among the Slovak intellectuals that surfaced after the foundation of Czechoslovakia. Ruppeltdt also expected that the participation of the ordinary Slovak people in this project would strengthen their national consciousness.

Ruppeltdt's arguments were based on strong caution against foreign culture. He thought that Slovak national culture was still weak and that it did not have sufficient strength to compete with the German and Magyar culture in multi-cultural Bratislava. In contrast, he recognized Martin and its local national associations as the epitome of efforts of Slovak national-oriented intellectuals who longed for the formation of their own center. Therefore, Ruppeltdt demanded retreat to Martin and its further development as the source of Slovak culture. Although Ruppeltdt presented rather ambitious projects for the reconstruction of Martin, his notion of Slovak culture and the Slovak territory was substantially defensive. On the other hand, other Slovak political leaders and intellectuals, who supported Bratislava being the center of Slovakia, not only highly evaluated its economic importance as the exit to the Danube, but also believed in the strength of the Slovak cultural influence and in the possibility of "Slovakization" of this multi-cultural city. As a conclusion, it is possible to say that this difference in recognition concerning the powers of Slovaks lay behind the disputes about the "capital city" of Slovakia.